



想山著聞寄集

13  
1191  
1



1191  
1



想山著聞奇集序

想山著聞奇集序

想山著聞奇集序

日月星辰晝夜晦明造次顛沛天下之人仰觀而俯察焉而至其不測之變則或昧焉山川草木鳥獸與魚跋涉性還視聽而畜養焉而至其不測之化則或惑焉佛神感格善惡報應華竺經傳紀述而贊揚焉而至其不測之應則或疑焉蓋疑者其知識之劣也惑者其視聽之狹也

藏書

序

昧者其問學之淺也。三母想山篤學而博涉。性敏而善書。夫書之為道也。摹範天地陰陽。以傳造化不測之秘。乃在自已神腕之間。故至事物休咎。因果報應之迹。無有不寸管一揮。掌握其霸柄者。謂出其優遊漁獵。硯山墨海之餘力。而然者非哉。今方就其所纂述之異聞奇觀。數百十條之中。特抄錄核實著明。而近人情者。為五

十卷。題曰著聞奇集。成請序余。告想山曰。佳矣。此篇隨聞隨筆。故不緣飾文之浮華。靡麗之態。倣事實達意之法。而天地之恢宏。萬物之繁衍。報應之微密。莫不細論詮考。纖悉著明矣。莫道俚語猥駁。蕪辭冗長。不足采觀焉。世人因以擴充其見聞。覺知則昧者明矣。惑者決矣。疑者信矣。善哉。想山不啻筆鋒入于木。著書亦

上梓。自非學識老鍊。詎得能然耶。每事輯錄。絲  
解縷折。似微而著。然則其題之於著聞。名固不  
空。或曰。想山腕力有神。此篇總括造化奇機。遊  
戲書道三昧者。豈不其然哉。豈不其然哉。

嘉永二年歲次己酉嘉平月

方外子無黨社主僧允識



近<sup>ニ</sup>茲<sup>ス</sup>勳<sup>ニ</sup>德<sup>ス</sup>之<sup>カ</sup>也<sup>ニ</sup>老<sup>シ</sup>部<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>為<sup>ス</sup>  
少<sup>シ</sup>老<sup>シ</sup>猶<sup>モ</sup>多<sup>ク</sup>老<sup>シ</sup>延<sup>シ</sup>年<sup>ニ</sup>說<sup>ハ</sup>唯<sup>ニ</sup>壽<sup>ニ</sup>  
時<sup>ニ</sup>之<sup>カ</sup>不<sup>レ</sup>目<sup>ヲ</sup>耳<sup>ヲ</sup>今<sup>ニ</sup>究<sup>メ</sup>想<sup>ハ</sup>山<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>守<sup>ル</sup>業<sup>ヲ</sup>  
研<sup>ル</sup>究<sup>ス</sup>其<sup>ノ</sup>物<sup>ヲ</sup>生<sup>レ</sup>記<sup>ス</sup>其<sup>ノ</sup>名<sup>ヲ</sup>實<sup>ヲ</sup>可<sup>ク</sup>謂<sup>フ</sup>  
勤<sup>ク</sup>字<sup>ヲ</sup>其<sup>ノ</sup>支<sup>ヲ</sup>強<sup>ク</sup>其<sup>ノ</sup>奸<sup>ヲ</sup>滅<sup>ス</sup>能<sup>ク</sup>不<sup>レ</sup>也<sup>ニ</sup>  
仁<sup>ク</sup>義<sup>ク</sup>之<sup>カ</sup>教<sup>ヲ</sup>訓<sup>ス</sup>志<sup>ヲ</sup>窮<sup>ク</sup>其<sup>ノ</sup>怪<sup>ヲ</sup>之<sup>カ</sup>地<sup>ノ</sup>妖<sup>ヲ</sup>祥<sup>ヲ</sup>

之為披与友也其才者也其お學  
 教二世少補其因書此事以  
 室法序く書云  
 嘉久己丙子乙亥

尾張 佐々木庸綱撰



凡例

予若年より固不見る如子態万神教子意系よ  
 乃大然りしと年月を後るに後以次中り  
 忘却 記憶宜敷臆胸に有欄を故に跡跡を顧ぎ  
 如竹根と筆記の 並子縁のとも 固友の意  
 告まりし思ふ而己の 亦とあるとも 又久し勿謂  
 今日不学而有来日勿謂今年不学而有来年日月  
 逝矣感不我定嗚呼老矣是誰之愆 古人の誠も亦  
 僅に得るを銘とりの 得りぬる後意とたりて其後  
 固とあり多しと去らし来年乃 杖頻りに思ひ立弄漢  
 離漢秘談源秘漢乃 四糸とありて 書記の 並んて  
 但書 草稿なり 漸五十卷よるびり 回志の人

本草格と因りて此書、因意の賦と号し、而して此書を  
童蒙又と題し、思賢輝と善道、つとち、教化めも成  
り、まは、授行、一、回、友、よ、あ、ま、し、く、い、ら、る、う、ち、に、あ、り、あ  
ら、る、ふ、ま、せ、す、順、よ、ほ、ひ、追、く、授、行、を、て、終、り、と  
置ぬ

一人の語と字に正説也、云と十、よ、七、八、述、の、語、傳、え、の、遠、の  
又、を、安、乳、遠、の、誤、謬、と、思、を、致、く、も、多、く、或、は、是、を、成  
活、く、く、と、首、尾、連、接、せ、ま、し、て、著、記、の、難、を、い、ふ、も  
あ、く、そ、外、奇、な、ら、ま、と、ゆ、め、ら、く、世、俗、の、常、あ、ま、さ、だ  
物、矣、と、語、る、よ、毎、舌、と、云、く、面、向、く、活、り、の、一、甚、あ、ま、さ  
ゆ、り、て、ハ、遠、と、語、く、有、一、事、の、極、よ、言、傳、の、族、も、ま、は、  
實、小、抄、拾、六、の、後、終、り、り、矣、事、に、お、遠、の、ま、ま、と、思、ひ、て

記録せし、ハ、十、が、一、あり、ま、終、の、一、よ、と、首、尾、不、交、の、事、  
又、を、十、に、實、ら、る、事、と、あ、ま、さ、く、形、實、事、と、お、遠  
の、事、と、多、う、く、一、古、く、と、又、と、勵、く、記、一、並、び、て  
勸、善、懲、惡、と、成、成、と、彈、の、ま、場、場、り、は、滅、却、せ、も  
多、う、く、一、又、是、を、教、誨、の、龜、鑑、と、成、し、ま、事、ま、も  
傳、安、の、得、り、も、ん、事、と、思、ま、し、て、記、し、て、後、世、へ  
傳、ら、る、か、も、多、う、く、人、信、は、事、と、思、お、と、る、小、其、實、の、ま、  
た、ま、と、思、ひ、あ、ま、と、思、ま、し、て、記、し、て、後、世、へ、傳、え  
ら、る、か、ら、い、ま、し、る、疑、の、あ、ら、う、ら、う、と、記、一、並、び、傳、ら、る、う、ち、に  
あ、く、あ、端、と、考、へ、る、に、記、一、並、び、一、並、び、を、用、捨、ら、る、人、の  
心、の、ゆ、り、或、は、又、後、年、の、ま、ま、と、思、ひ、り、の、事、の、出、来、ま、  
漸、く、後、の、證、と、成、を、有、く、ま、ま、記、一、並、び、や、勝、ら、ん

とく新記海より

一 柞吉未震兵と信くざるハ心の心は育奉と安産より  
靈夜弁性ハ自然の成りて存びあはれ進出あること  
あつても故と以震愾と見く執疑する人多く更り  
容ざる人とも又不思議とみる能感伏なり幽明  
二世の理を信する人とりたともを怪異と又道成  
異一車奉く斗入難く身と信くともさく交  
わらへ一信むじとも事人毛と事とせむとも無の慮と  
あをともあり強く信ざるに好む見人の意は  
まろのとも異も唯は篇ハ安前見る所の遠いごん  
事と恐ましく文飾なりあるあ一而已  
一 是書と思ひ出かまへ又ハ人の信ると安まへ或ハたの

筆記と自らまに記一を多く用く時代前後と  
ワらず混礼うて跡は十餘年来書成るとあ後不  
治骨に綴りてま後冊子となりてる也元來は書ハ  
勸善懲惡の爲子孫に示さんと思ひわらへ  
巻記のつらなりまに何くは書の文粹ハ春  
著用集と撮一あ書つるものも好む又新著用集は  
似きく書あふものも好む素より文勢ともがうて  
筆せしものも好む唯信通西と思ひく信く意と  
加へて時よ信ひ書り但せく書集成る進の事  
よめ故く着函せしと云書に好む故といふ論  
博識の君子よ示すと云書は好むまハ文面ホ若  
拙とてあひの事なり

一 此書ハ元來一ツとして虚説と思ハ書載せしむるも  
 然る前に嘘と云ふ人ありしや或ハ述成事又ハ實事也  
 事と云ふ色ハ形更其事乃事ありざるを云ふ人  
 たり且又活ノ義理筋道ノ外情態ありしや  
 煩雜と厥もびきり書記せしハ其書の貫通を  
 希ハ老練心之ありしや鄙俚重復と有る事あり  
 一 今ハ昔傳りし成店つら事或ハ古人の筆記成る  
 ともか又ハ傳え並つら活ハ今是と再應行正  
 然んと欲とせしむる如行ともカ乃乃るざる事ハ捨て  
 徳さざる方まさるべしとせしむる事と厥ひくは  
 活ノ支那の消失せんを欲り多しと書記するも  
 まく有見の人を心しあり

一 此書終の一車として意の及ぶ文を行正し  
 事實あり 麴結せざる極り記一並たり 極しども  
 事多端あり 理と又極りなるも色ハ其事實を  
 遠ハ居る事と有る一是本の分と自余のあり  
 及ぼし 悉く形またぬと答ひま

一 去信の口碑ハ想と護とあるは是れと云難  
 朝りしと云ふ野は形もこと人を養文ある  
 茶音活りしの中は採擷せし事ありしと云  
 史本の事と云ふは記一並ぬ免角は書ハ自意を  
 加へる人の色は但せし有るは記と云ふ一  
 のは田支野人の鄙俚と云ふ遠りぬ極り書外を  
 却りしと云ふ



一人名地名を記しに勢筆としてあり兼る事又  
其人其名の正否を是居るとも或人又ハ何某或  
某の村なり記一處つるも有且文字のあは兼る  
うか文字り記一處も是是園推のたひと思ふ  
まゝなり

一 予ハ尾陽の産故冊中に我云くと書述するハ  
幸國の本紀の中年之後東都り住する事又  
故と云に戸の事又多一の國と名ふも  
是の地名と云ふハ皆江戸の事なり  
一 予ハ世學後見博く書と見ると先人の論は  
有事と云ふ又古來回板の漢有本未も知兼る  
物も適見及つるとハ其似歎と奉く後繼はゆ

一 予ハ且東遊記西遊記又ハ著聞集の類ハ人の度  
有る初居る書のもも童蒙のなり安なる書  
なり一處と有強く意を加ふなり  
一 予ハ胸中ニ記憶する奇談雜俎ハ少くも且目録  
支那の採集と量りゆるも己後ハ屢書記す  
一 予ハ思へども勸勞の餘暇多しとる人自己  
俗事又多忙ありと云ふ外ハ志道も  
一 予ハ丹の毛筆ハ又違ふと云ふも又予ハ癖  
一 予ハ思ひと雖も嗚呼方と云ふも亦謂  
一 予ハ因縁と云ふなり

嘉永二年己酉夏

想山齋主人誌

作靈驗神異の事一八巻多し  
 大神宮の御蔭あり此一条りく御幣法授の諸國へ  
 降るせり本神腫くの奇瑞いともう且國への  
 人氏奉る系指り想く人氣の曾とまき掛待  
 祓りあせりせり赤珠とて守るる丈夫悉く集録し  
 ろひく是と平法の巻首として五巻より一巻のみ  
 法を思ひ子細有り右の五巻を後ひく本まき  
 たりやと並同きことびい主次第の方より新上本  
 たり一平

庚戌孟春

青山直意

想山著聞奇集巻のき

目録

- 一 出雲大社遷宮の時雲出る事
- 一 天狗の怪妙 物實録の事
- 一 鏡臭く名付く事異臭の事
- 一 晴葉所靈験の事
- 一 頼馬の事
- 一 葛蒲の根臭く化さる事
- 一 毛の降る事
- 一 白蛇靈異と頭く事
- 一 靴の行列異讎とたり事
- 一 附火と焼く事



一人の金と探丸ある報の書にせぬ殺さる事  
附書さうの事  
一吉夢應と題する事

出雲大社遷宮の時雲出の事  
出雲の國の大社古昔より甲子の年と遷宮改修の  
事とぞ大社の宮大工神門植進と云人長命と寛政  
の末の甲子八十一歳の事と云り中此人此の  
語曰此大御社の遷宮と云古くは八雲山の白雲  
鸞出と渡御と遷宮の事と奇瑞と皆人おとす  
事と云手と延享の遷宮より八眼前おとす事  
の事と云今其瑞と云る事と希にありぬ  
長命願つる二夜神瑞と云る事と  
文徳と云る事と云る事と云る事と  
よむ祖文の常々示す事と云る事と  
云と云る事と云る事と云る事と

出雲大社遷宮の時雲出の事



出雲の國の大社古昔より甲子の年と遷宮改修の  
事とぞ大社の宮大工神門植進と云人長命と寛政  
の末の甲子八十一歳の事と云り中此人此の  
語曰此大御社の遷宮と云古くは八雲山の白雲  
鸞出と渡御と遷宮の事と奇瑞と皆人おとす  
事と云手と延享の遷宮より八眼前おとす事  
の事と云今其瑞と云る事と希にありぬ  
長命願つる二夜神瑞と云る事と  
文徳と云る事と云る事と云る事と  
よむ祖文の常々示す事と云る事と  
云と云る事と云る事と云る事と

八雲山



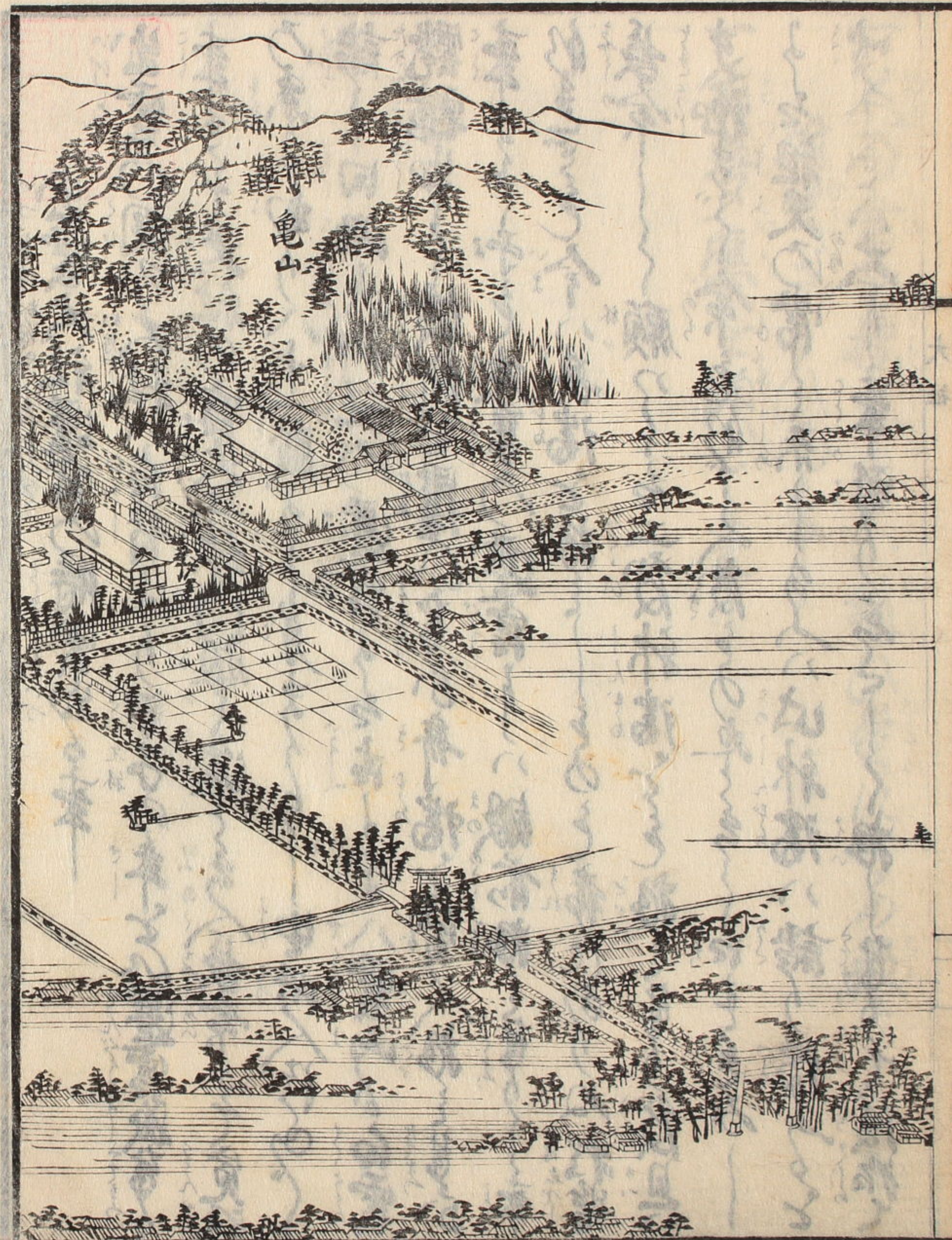
大社  
鶴山

大神都

小西仲衛藤原秀祈敬画

一ノ二

亀山





神靈なるもどと古より語り傳ふるものありて其の  
旧記を見てもさうに眼をねむるものありて今も  
侍らむる社家行末の世に其の聞かむに記し  
け雲入出のり出雲と云國名を記し素戔嗚尊の  
八雲三の神跡ありて山の事也代々其の旧記の  
事ハ博識ハ流して教ハ賢せむと實にまことと  
記す

案ずるに黃帝ノ位ハ登りありて其の案雲教  
りて瑞と称せしむる雲の官と傳り又雲書と  
造りて事ハ旧記ノ有る人のある事たること  
上吉の事故虚と云ふ人もありて實にまこと  
なり又不思議と思ふ人もありて強く公りも

然るに事なるも女文と云所と和漢同法と云つべ  
は時造りの事と瑞雲書と云又案ある故雲書  
と云ふ古聖の他法現りて道ハ傳來せし  
此雲入り治雲豊雲高貴雲教雲成ハ宗白  
黒木の差別有る秘傳と云道ハ傳入の所社  
の雲と時りありて色々の差別を云ふと神靈  
の靈應ハ人智と云ふ福も徳もなり此も唯  
拜教と云ふ事なり

天狗の怪妙并物實錄の事

天狗の奇怪妙變ハ凡人の不知の事なり人智を  
量るべしと云ふ種類を極る者事と云ふ  
國所よりして其の業を又云く習りて思ふ

夏より北義濃郡と郡武成於東武濃實茂於惠於郡  
色乃天物ハ主所業一糸の〜と〜と〜と大槪回松の  
性との〜と〜と先山の木と伐時ハ初〜奇と入る  
物實解〜と〜と松〜山神ハ供へ〜と〜松ハ食  
のち木と伐之物〜と〜種〜の性〜中〜木と  
伐事ハ難〜と〜所〜木と伐とる山の〜折  
物實解〜と〜齋ハ仕進〜松ハ性有〜木と伐事  
た〜ぬ〜ぬ其性性〜と〜一松〜と〜多  
杣道具と〜と〜又木の居ハ奇の頭と扱九或ハ心  
大本大石と居〜と音〜と〜甚〜時ハ山と〜崩  
叢と〜扱の勢と〜扱小性の内ハ甚〜と  
垂〜物實解〜と〜神と〜奇〜松〜と〜

本と伐事ハ武時濃別武成於志津野村の  
三里村後〜と〜平山と伐〜と〜是ハ山と云松の  
跡〜古木の覆ハ整〜と〜松林ハ村後  
小松林の平山〜と〜中〜天物の〜と〜  
思ハ〜松の物實解〜と〜松と伐  
〜と〜松と奇〜と〜皆扱〜と〜奇の頭と  
〜と〜天物出〜と〜道具と〜と〜  
先せ〜と〜中〜と〜仕事〜と〜物  
實解〜と〜と〜松の家に〜と〜支  
餅と扱〜山神と〜と〜松と  
聖日ハ主事〜と〜本と伐〜と〜一年ハ村の〜と松  
〜と〜予ガ下男〜と〜聞〜と〜本と伐居〜

天  
狗



一  
六



天  
狗





とき介と梅と一本（お付のり）は御とて  
〜願のりあり梅汁と梅汁と知とて本（お付）  
〜後始〜願と〜事とある。不思議と云を  
餘りある事其時ハ袖道具とい川のりより取れて  
其のふりある事と物質餅と〜いびぬる  
先きもさきとありて元ノ所（所）に並〜あり  
〜と〜色〜〜ハ〜根の性も常の事故〜て  
不審〜ハ〜と〜餘國ノ人の見〜時ハ奇怪  
のふ事〜

物質餅と〜時ハ先村内〜ハ物質餅  
〜と〜に〜（を）考ノ男女大勢〜集りて  
〜版と強〜焚〜と〜梅り版〜て〜

費と能焼〜味増と附先物種と〜本乃  
〜に〜と〜法〜供〜と〜後者ノ位  
に能〜管ハ〜事と〜高〜首と物種と  
ハ版と梅〜天物集り〜村内ノ家をよ  
てハ一切梅〜と〜回國苗木色〜ハ是と山小  
を版と云〜大焼版と〜又小〜梅と串に  
費と焼〜と〜ハ〜版と云と  
〜と〜製〜方と〜方も〜べ〜是古と云  
案版の事〜今〜は近立ノ方〜ハ案版と云を  
又文政七八年ノ事〜苗木領ノ二ツ歳山  
本と伐出〜連十月七日〜山入〜ハ〜版と梅〜が  
山神（供）事と〜皆〜食〜〜

獲り入るゝ大木と伐無り者一山荒出せ故  
術と心附早く候と捨籠入るゝ事一山荒出せ故  
けり支るゝと心来ハ右意一山荒出せ故  
り供の事と苗木後山有竹某の世なり  
又戦後の國蒲原郡磐前郡の拙人二團り心入  
本と伐る時其一枝と折其枝あり考く是哉  
奈くさき大木ありハ獲りて業者由之又戦後  
の國出羽の國かど一山荒出せ故  
入時ハ鱧魚と云々と懐中一山荒出せ故  
難儀なり時と供れを難あり安く伐得又得も  
終日得く得物あり時ハ山の林ハ新橋一山荒出せ故  
頭と少一見せりけり歎と得せりあふく感意あり

あまゝ金形と見せ多しせん新ふえある時を  
速り感意者事と云々と云々と云々と云々と  
うくまをの侍ありと云々と感意と云々と云り  
鏡裏と名付つゝハ異象の事  
我虎張の國知多能模頂雲四代官の下役者居竹某  
文化年中回而五劫の時漢人の捕るゝ矣其形全く鏡  
のうきことハ故鏡裏と名付ありと云々と云々と云  
り報の真捕るゝ事ハ昔漢りよと云々と云々と云  
海色と云々と云々と云々と云々と云々と云々と云  
と云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と云  
うく雲行ハたは常一雲ハ右何来ハ能く会と龍宮船と云  
筆記り鏡裏と云と條有く享保の初め房別浦を



捕まふふりしめく江戸小田系町の者店へ持さる  
 先づしき臭を全形丸くきし液一三尺計形  
 せめめりてしき臭を全形丸くきし液一三尺計形  
 似たり虜つて又いささるゆへ版の下サ一白  
 脊く版の中守長さ八尺計りの鱧骨く又ハ臭よ  
 し〜虎う〜甚どあつたの臭者〜人〜之濡ひて是れ  
 ともを版と志る人け〜形ち漬よ似さるハ漬魚  
 とも云を版と志る人け〜形ち漬よ似さるハ漬魚  
 を見せハ南方り漬臭を常らぬ事漬ゆゆ  
 けり若く臭の事〜とあふや〜り陳海臭  
 物志の臭ハ又合ふり成る事〜は龍臭私の漬魚ハ  
 大り遠ひる臭之物と志る先回日の漬り新記〜

香〜後遣の一助〜と

精薬作靈験の事

市谷谷町自陀院東叡山の先任念阿院ハ隠居〜  
 後世の弟子の巨誠の〜居を〜言悔康申堂常照  
 寺〜隠居〜病と療〜居り〜は念阿院の  
 小姓ハ山田忠三郎〜と云今年天保九十三歳なり〜が  
 去周年の冬〜り不審〜是小疔出来〜り後〜  
 出来増り〜六月は即り凡も是ハ大小百余出来  
 大成ハ豆粒〜り〜と大〜小指の預後〜分と多く  
 出来〜甚目見苦者〜たり〜故念阿院の〜あり〜  
 是ハ目黒の精薬師ハ靈験〜た〜創〜疔の  
 事ハ新〜り〜有〜安及〜りハ佛〜平癒の

誓願と籠ま留り精と生逢らぬ物なり一病ると  
日く兼作の美言と終一日は女夜泣く唱事なり  
〜六月十八日は精薬作(精の形と馬)〜ふ小三  
後馬と網の新願なり〜君り日く美言と女遍は  
唱(念)下るるよ不思法や朝日り霜の消る〜  
共一日共二日はあり〜ハ餘程癒無り〜ぞ有難き  
友よ別〜不思法なる事ハ共二日ハ一聞〜事  
出来〜甚どお込作日〜聖女三日〜二百あり〜  
急り〜彼女遍の美言と唱(念)して志を成る  
〜女四日はあり〜癒無り〜病忽ち元の〜  
盛は成り癒〜是ハ〜心付込〜急ぎ美言  
〜聖薬作佛と〜おき〜聖子少〜

癒さる故又念所院世疾やうき〜七月の十日は兼  
薬作(兼)治り〜精馬と〜指も懺悔とさせは友ハ  
包急り美言の救と増日〜二百遍は唱(念)せり  
〜又速り聖意有〜病頻り〜痒〜初の癒え  
病の預申〜紫り〜願の方ハ滅むら分出来〜  
主肉ハ十八日はハ癒癒のうせも〜と根ハ  
落出〜〜成共二百日はあり〜ハ〜も跡は  
平癒あり〜有り癒〜八月廿七日は又強馬と〜お口は  
兼治り〜せ〜〜想〜神佛の靈験の新願ハ  
事ハ幸ひ色の事なり〜事申〜ハ現願あり  
〜念所院具り吐き〜又忠告を酒の飲る  
席より侍〜在〜た商人と〜吹打と

記ぬは薬作伴の慈覺大師の作と傳へて天台宗  
の成就院と云ふ安室のり又予が知己と云ふ編り  
友村智山と云ふ薬作伴の坐と云ふくつかの先年  
四谷の屋町一丁目より住居せし時同丁に大工の某と  
云ふ者有りて疵駭爰出来り物候のりく六人も勸め  
己と因りて是を日黒の鞘薬作(鞘と一生断との  
うと願とつけ不目と)悉く愈せり物有り  
又うるとも年程と云ふ大勢奇合ふふ而りて鞘と  
食故友達共のりよふ前ハ先頃疵の出来たる  
と云ふ因りて鞘薬作(願と慈鞘ハ一生断物と)  
まゝふと云ふハ物とやと結むと大之言と云ふ鞘  
あつハ物と物と云ふと云ふ鞘ハ食むと云ふ云

不自由故鞘と物と是を八中者と因り事ゆゑ  
物と物と云ふと云ふ物ハ生活食まぐと云故年  
候のもの物と云ふと利益と云ふもの物と云ふと云  
の荒云と世教と故と云ふ居合と云ふ者も  
皆と真と醒と憎と思ひたりと云ふ疵忽ち  
元の如く有り生来と云ふ物候と云ふと云の毒  
り思入者と云ふ人々事と薬作の所得のり  
事と云ふ指と云ふ物と云ふ後右の大工の如  
せしと云ふ又云ふ智山ハ右の町屋と持宅せし故  
事と云ふと云ふ事と云ふと云ふと云ふと云ふ  
悪事や世法成事ハ我と云ふと云ふと云ふと云ふ  
と云ふと云ふ人の不義不法の事と云ふと云ふと云ふと云ふ

庵うにさし〜別〜見おおせぬがのさ〜いゆ陽のさ〜  
童輩の〜能心得る多〜相出せと〜或人よ  
牛込原町の本挽源兵衛と〜着れ抱の着の吐り  
大坂〜の事あるが此本挽仲間者種病と〜  
病氣平癒と〜折ふ〜石と断お〜て三死せ〜  
〜りも石ハ喰む〜その又此〜断お〜  
〜も不自由の〜のう着〜不持極の  
之預〜支〜種ハ納〜ませ〜忽ち  
病苦ハ全收せ〜物に〜飯の中  
小石の着〜ちり〜當面〜石〜思ひつ  
〜や飯〜共〜噴り入〜怒〜復〜あ  
〜ハ種〜智めと〜た理〜り忽ち

種病再發〜遠〜全收〜者ま〜あり  
是ハ又改年間の事成〜者名前も〜  
支打〜今ハ急〜砂り〜事〜  
又ハ活と〜竹某の云々或人の或人全尻履大  
権現〜形事有〜利益と〜むる〜生  
緩臭と〜と誓〜り〜後年月も  
〜余儀〜方〜行〜緩と振舞れ〜  
〜時断ある由と〜主人の〜黙心  
種〜物〜外物と断〜即座〜洗  
に漱〜金尻履〜行念〜先ハ緩杖  
断物〜今黙心難〜事〜断  
物を纏〜下〜一〜納〜させ〜

然り所念か一をさりて故りや何の障りもあり  
 しを又或方よりを編と振舞んふかり今度より  
 のうらうらうと好むバ編と好つてり今年ハ首如六  
 外のものりり好むゆへに主人の初る故御六日廿  
 りのりき物は断りてんは又全昆羅言は余波き  
 澤と前の如く所念は今度ハ虎と断およと  
 きんと誓へりて後より福を好む或形はゆきて  
 何心する黃骸とさるゝは思ゝの害ありしこと  
 悉く振舞り余り不思効り思ふに能員は  
 黃骸の換振り十二支と焼付てかづも虎の黃骸  
 と塗ひつかりたるは事之は行きごと令し自  
 振りの神符あり候はるはハ加偏の事也

類馬の事

馬類馬と云病もく一車死するも尾張養濃色  
 りて是とギバと云焼死とかがるも云去依を  
 りてギバと云ハ一種の魔物有る馬の鼻より入  
 魔りおんバ馬忽ち死す云傳る事ハ予が年ハ  
 魔物有る遠の思ひて馬術師練乃人  
 り尋かよ多くハ馬の病なりと云魔物事  
 あり人少し御も今成事と云まより書付

天保三年壬子六月八日  
 後那志津野村の百姓也  
 け吉松八九歳より馬と好む今年二十五歳まぐ



馬方と彼世の馬の事いふ切者之は者云  
ギバの虚の實の存もむりえと近江の國  
大津の東町の穢多の原死〜ギバ成馬と覺  
せし由去俗のり傳り口をゆ〜なりぬま形ちを  
見〜知り居や〜同り存居り〜昔〜それ  
如何成形ちのりものや〜同り由虫の如〜ま〜の交  
の心〜馬〜素〜か女〜釋〜維の衣被と云〜  
金の櫻指と冠り紙考のきれ〜ふやうに天のひ〜  
と海ある〜馬の急噴洞〜股網〜と切首と上げ  
只事あるぬ声〜嘶き〜其時ギバの素〜  
快馬の前足と我馬の口の方〜流〜と我馬の  
身より鬚の方〜踏〜馬の面〜ひ〜と懐抱の

は時彼ギバの怪女必あり〜知〜等〜姿ハ  
消失ゆいさ〜馬の右の方〜三房と〜  
〜丈成り即死〜物〜不案内の馬士を  
多〜い〜けら〜仕舞ゆい故り常に馬士  
事〜と〜居り〜は馬士も〜ハ  
羽織〜福付〜河ま成ハ風呂浦  
又〜薄圍薦楚やうのり〜何〜と衣被のよ  
帯の〜羽織居り〜色ハギバの指〜ぬそ  
〜ぬギバ室〜り〜馬の頼り〜付〜  
た〜口〜と死居〜彼馬士も〜の右の神才  
〜たの神ハ口保〜せ〜彼魔物  
〜馬の首〜せ〜馬の右〜ん〜と

馬の首を強くたり向く事な尾のこの脊筋は  
穴の背の百舎の毛(針)とありへば丈切の如く  
是と為針の唱の魔物馬の鼻より入る尾の  
穴へ出ると中を事故たり(と)せを隔る遠く  
又その鼻(出)り(り)の傳(り)へども時(は)馬と  
教(は)る(る)成(る)の(成)り(り)固(く)章(てい)序(り)の(成)鼻(は)出(る)  
の(成)と(成)る(る)者(は)水(みづ)り(り)き(き)く(く)言(は)る(る)事(は)  
成(る)事(は)成(る)り  
相(あ)又(また)彼(か)ギ(ギ)バ(バ)は(は)裁(ざい)皮(ひ)を(を)る(る)や(や)と(と)同(どう)は(は)二(に)度(ど)を(を)や(や)り(り)と  
言(は)ふ(ふ)を(を)魔(ま)物(ぶつ)と(と)云(い)ふ(ふ)唯(ただ)一(いつ)の(の)う(う)り(り)又(また)裁(ざい)つ(つ)と(と)云(い)ふ(ふ)  
量(り)難(が)し(し)始(は)り(り)を(を)る(る)顔(が)ん(ん)色(しき)を(を)後(のち)に(に)を(を)る(る)事(は)  
顔(が)ん(ん)又(また)と(と)同(どう)と(と)松(しょう)り(り)や(や)負(お)る(る)は(は)あ(あ)き(き)ら(ら)と(と)舟(ふね)試(し)る(る)よ

史(し)と(と)ハ(ハ)竟(けい)を(を)口(くち)腔(きやう)の(の)去(き)り(り)完(かん)早(はや)怪(かい)り(り)竟(けい)  
を(を)り(り)今(いま)一(いち)度(ど)を(を)る(る)ハ(ハ)二(に)魔(ま)う(う)一(いち)魔(ま)う(う)見(み)換(か)り(り)ハ  
伝(でん)せ(せ)む(む)り(り)候(こう)言(は)る(る)事(は)元(もと)来(らい)は(は)松(しょう)の(の)精(せい)神(しん)  
怪(かい)成(せい)者(しや)之(之)た(た)り(り)重(おも)方(かた)の(の)事(こと)と(と)他(た)の(の)者(しや)と(と)ギ(ギ)バ  
を(を)る(る)事(は)若(わか)者(しや)と(と)同(どう)り(り)皆(みな)誰(たれ)と(と)を(を)り(り)ハ  
誰(たれ)が(が)見(み)る(る)事(は)と(と)同(どう)り(り)玉(たま)虫(むし)の(の)麻(あ)呂(ろ)の(の)  
大(おほ)き(き)の(の)馬(うま)り(り)赤(あか)く(く)釋(はな)す(す)絨(じゆう)の(の)如(ごと)く(く)交(ま)じ(じ)り(り)と(と)あ(あ)る(る)  
衣(い)後(ご)の(の)口(くち)腔(きやう)の(の)絨(じゆう)編(へん)緬(めん)の(の)糸(いと)は(は)遠(とほ)く(く)の(の)何(なに)も  
女(に)雛(ひな)の(の)如(ごと)く(く)櫻(おう)花(は)と(と)冠(かん)り(り)居(ゐ)る(る)白(しろ)文(ぶん)の(の)馬(うま)は(は)浪(なみ)  
て(て)四(よ)け(け)の(の)栗(くり)毛(げ)席(せき)毛(げ)の(の)如(ごと)く(く)怒(いか)り(り)ハ(ハ)一(いち)さ(さ)び(び)も(も)如(ごと)  
中(ちゆう)に(に)と(と)馬(うま)と(と)牽(ひ)り(り)往(むか)ひ(ひ)者(しや)ハ(ハ)馬(うま)の(の)吐(は)け(け)り(り)  
仕(し)り(り)故(ゆゑ)九(く)十(じゅう)里(り)に(に)方(かた)ど(ど)の(の)馬(うま)の(の)変(へん)ハ(ハ)白(しろ)の(の)肉(にく)り

顔馬



一ノ十七

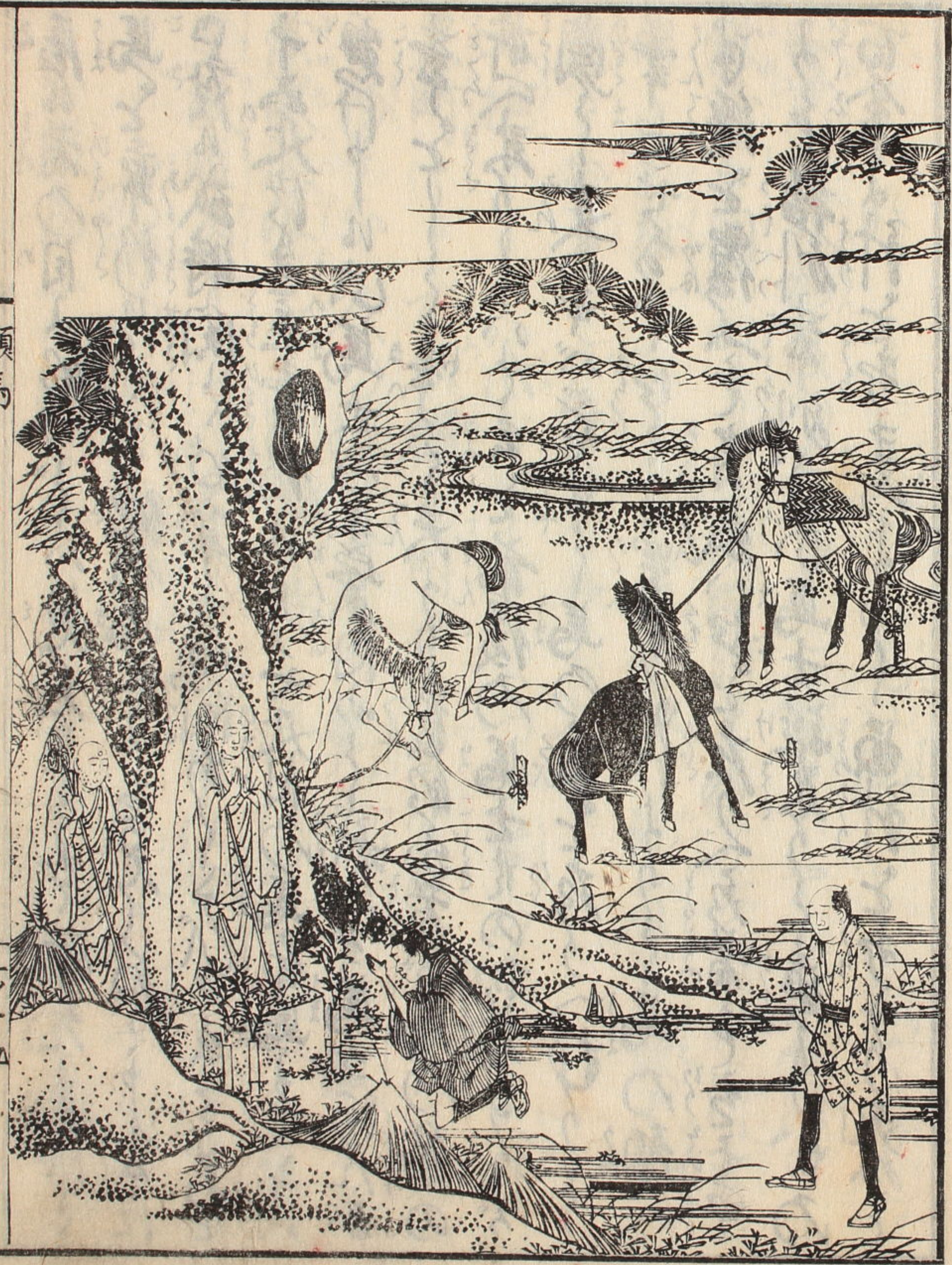
三娘筆雪翁



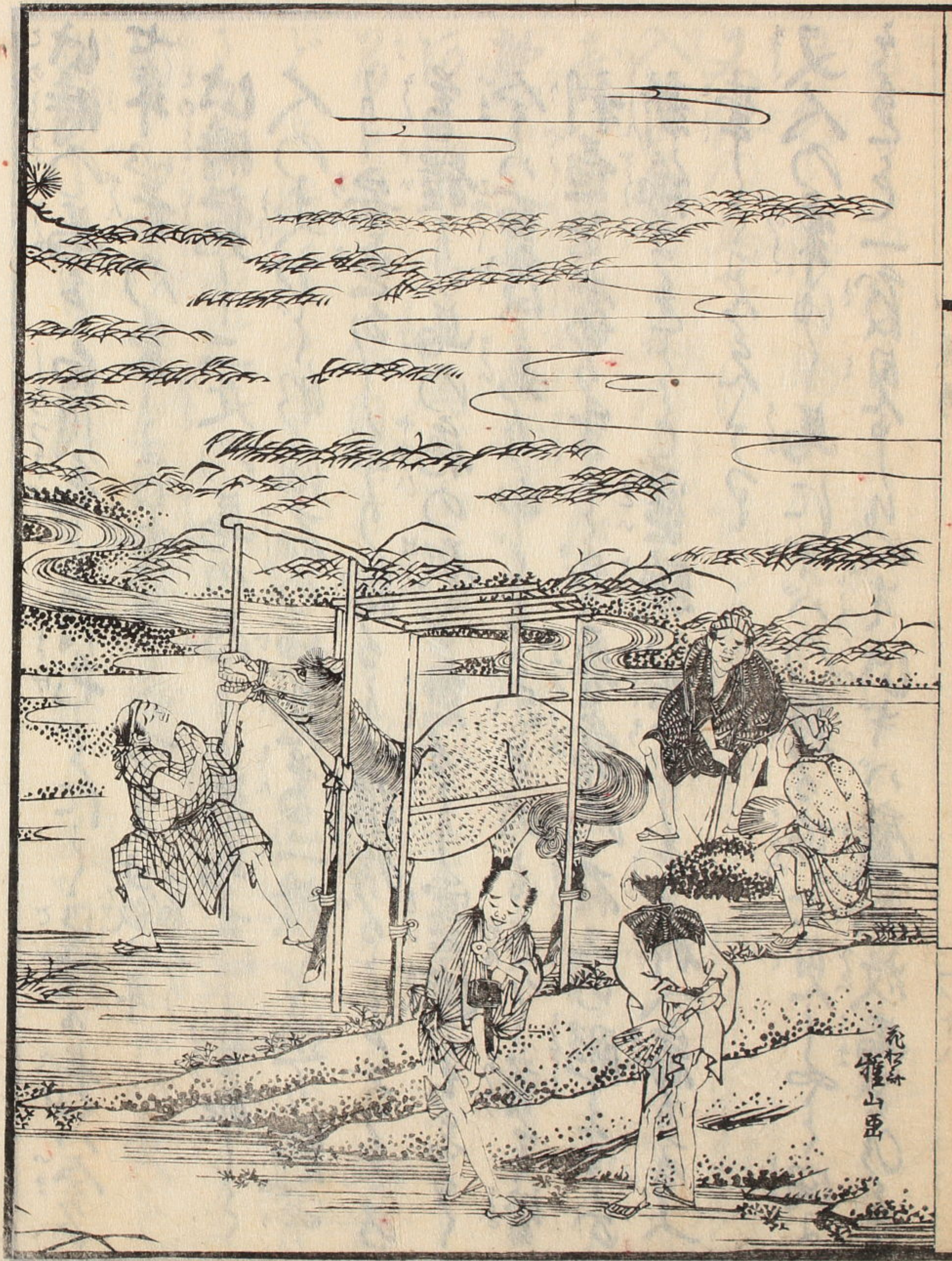
連り寄ぬりし私のかげらも無りし馬と白  
月毛と御目馬と四座は〜り  
又他の馬とけ〜と見え〜〜回り近村の  
合の野の馬の負ともある所四座の馬の六六も  
あ〜〜安治〜〜居〜〜二十回計り向り  
驚ぎ者〜馬類りり野〜〜と〜〜  
河ま〜〜あれ馬が河のやうなる事ともあるや  
るもの〜〜風とた〜〜死す馬士  
〜〜〜〜は方〜〜物樂と  
〜ギバのけ〜地と〜〜又情の〜  
回〜者〜と〜〜  
尖め〜〜皆〜顔〜〜あり馬と牽ゆりし

は時の馬と白月毛と月毛とた〜四座の毛八合を  
七年の事〜心腹の〜り  
は時竟〜二丈の馬のる〜馬士中〜  
人の支わ〜石の地産二體と造り野中  
り安治の〜あり物〜〜  
為體り馬の病の取と〜〜靈験り  
今ハ百度ありあ〜〜も多〜者〜皆  
利益と蒙り事〜尋常の石之の彫〜  
新像〜〜靈験ハ〜〜  
事〜〜  
又人の事ゆ〜馬にギバの無〜と見え〜  
〜〜一夜見命り〜はギバ魔物故馬とひ〜

頼馬



十九



花  
籠  
山  
馬

居ゐの者ものの目めの如ごとくハ見みえやさむと迹あと先まへは並なみびく  
馬うまと車くるまの如ごとく他ほかの馬うま士しよりさるぬくも車くるまに  
口くち付づの或ある時とき同おなく故ゆゑ車くるまとの同おなくさびらきとるを  
十じゆ六ろく是こゝに是こゝを車くるまの如ごとく七しち是こゝ自みづかりの馬うま白しろ馬うまをそぎバ  
惣くわへハハハ馬うま士しハ不ふ案あん内ないあ〜我わが馬うまが河かんか  
事ことと〜〜〜啼な〜〜天てん〜〜復ふつふ者ものが馬うまの顔かほの  
所ところへ来きり〜〜ハと云いと前後ぜんごの馬うま士し其そのの切き者ものらるが  
馬うま〜〜〜馬うまハギバジヤ早はや〜馬うまの首くびとた〜〜へむりり  
車くるま上の上せらるる〜〜〜馬うまの顔かほへ  
車くるま繼つと覆ふく〜〜者もの或あるハとた〜〜人ひとの者ものをそぎ車  
〜〜格かく別べつ車くるま別べつ〜〜馬うま士し進すすみ〜〜進すすり〜〜か  
百ひやく舍しゃの針はりと赤あかまづ〜〜〜針はりと赤あか〜〜り死しぬと

あ〜ハ何なに〜〜も丈だけ〜〜馬うまハ脚あしり〜〜は是こゝハ馬うま士しが  
不ふ案あん内ない故ゆゑ前後ぜんごの馬うま士し〜〜と進すすみ〜〜〜女め備び〜  
餘あま程ほど自みづかりの如ごとく〜〜故ゆゑ附つ刻こくと後あとり〜〜〜行い事ことも  
的た〜〜危あや難なとの如ごとく〜〜ハ〜〜ハ海うみ女め車くるま故ゆゑ外あ  
色いろ〜〜車くるまと心こゝろ腹はらの〜〜〜  
又また借かり〜〜ハハはギバ〜〜ハ〜〜の車くるまあり〜〜大津おほつの  
東ひがし所ところ〜〜所ところハ穢きたまは多おほ所ところ〜〜心こゝろ腹はら〜〜ハ〜〜は是こゝハ  
と持もつ〜〜ハ〜〜ハ〜〜ハ〜〜ハ〜〜ハ〜〜ハ〜〜ハ〜〜ハ  
後あつち故ゆゑ彼か腹はらギバ〜〜馬うまと殺ころ〜〜歩あゆ行ゆ由ゆ〜〜車くるま〜〜心こゝろ腹はら  
史し故ゆゑ腹はら〜〜小こ日ひ史し〜〜大津おほつ東ひがし所ところ〜〜下したは合あ〜〜と深ふか込こ並なみ  
〜〜ハ我わ所ところの馬うま〜〜心こゝろ腹はら掛か〜〜心こゝろ腹はら〜〜ハ〜〜ハ  
〜〜ハ腹はら面おもてハ〜〜深ふかる車くるま〜〜心こゝろ腹はら〜〜心こゝろ腹はら〜〜心こゝろ腹はら〜〜ハ

頼馬

この版商と南辰つか馬りギバの掛いふこと  
同くし又いつたりやん私膏つか馬いひ版商  
仕居りさうと云ふあり

今園東うへハ世版商と想つか馬と見むと名吉  
屋色ハ十又八九ハ版商也西國北國筋ハつとや  
患うへ実東うへハ彼馬士ハ縁と云ふこと  
一向り見むと義濃尾張色ハ馬士ハ必と云り  
帯取ハつと云と相織居りあり

右吉松のハ所ハ實り正妻事也予長と老り  
國より所より一松ありさるを於諸國ハ老伯  
樂ハ國行並及事あり  
又一年濃別多藝於明徳村

養老より道程東山の方高須  
作鼻の進色なりあり

志味村ハ十捨松といふ者とも下男に抱えりこの  
里余村の方あり者とも又馬士ともとせし者とも  
委安母ありハ捨松ハ仲りハ松極の切者り  
あうへとも又明りありギバともハ白雲の如き  
虫と事と伯樂ハせと誰と怪らんこと  
中そのハ形とて鼻ハ尾へぬるとも  
うへハ色ハ甚つち月より七月迄の事とて  
月ハ別り多くけり七月とて秋風とてけ  
りさうとて八歳ハ馬と多くけり八歳迄ハ  
支ハ老馬ハ一切掛りさうとて女馬と  
良馬極多くけり伯樂のハ朝ハ時前  
七時過り掛りさうとて毛色ハ蒼毛多

黒麻毛くろまげをぬとまけ〜中ちゆうのまへ〜り  
前はま志し津つ村の村ぢゆう  
 白毛しろまげ粘ねり毛げ駿せん連れん法ぽう驄そうの類〜必白しろ色いろの馬〜馬の脚の事〜且吉きち松まつ  
同く事の遠〜入ぬ事〜僅十じゅう余よ里りの間〜  
かま事の遠〜入ぬ事〜僅十じゅう余よ里りの間〜  
 麻毛あしげの類〜及〜今〜所〜遠〜  
事〜見〜明徳てい村むら色いろ〜堤去きの所〜  
常形じょうがたを多くかけ〜田た畑はたけ〜かけ〜厩うまや  
み〜掛〜半〜地捨すて松まつが見〜け  
ら色いろ〜明徳てい野の〜牡丹たん蓋がい毛げの馬丹たん死しせり  
ギバのうけ〜伯樂らくのひ〜是〜法〜や〜同〜  
覺あり〜〜おまギバと避よふ法〜や〜同〜  
大垣がき〜守りの本もとれ有是と馬り怒おこま〜バ  
ギバと除〜〜近来こんらい〜柳〜外〜何〜

のがふ〜〜一〜活り〜  
予〜野別べつ總そう別べつ色いろ〜ハギバの就〜ハ  
必馬ひまの身と切〜脚の事〜云  
又馬またの平首ひらびしと切〜脚の地〜武別ぶべつ  
多層たそう於於新しん産さん於於色いろ〜出〜切者せつ成せい馬ば士したり  
身あり〜〜類馬ば〜切者せつ成せい馬ば士しの身と  
切り〜〜切者せつ成せい馬ば士しの身と  
身〜切者せつ成せい馬ば士しの身と  
月頂げいどう込この内の事〜使晴せいの日〜又馬またと南向むかひり  
時〜村雲むらぐも抜ぬ出でら自ら自ら又馬またと南向むかひり  
紫〜彼急いそ志し成せいる〜の中傳つたへ〜心こころを  
馬士しハ一切いっせつ南なん向むかひり〜紫むらさき〜事と我の心

類馬



啓物の目よとくはつからいなる馬ハ断て挿の  
如く之と云り大同小異國々種々成事と云  
つり

予或高士り其言秘密の法也〜授りては  
教め〜梵書と書こ馬の鼻のあつととお拂  
魔と漆く法有ギバハ馬の鼻竹葉の二十六會よ表  
〜二十六節有業の〜でハ切狭〜の傳め  
理と極〜事ハ備〜何業〜至  
巧拙り〜事ハ備〜何業〜至  
〜ハ間ハ合ぬ〜之歳度と事ハ〜  
得りよ〜真の切者〜ハ謂〜  
又伽婢子後篇寛文年間り白尾濃後遠冬別の回

挽馬風〜と有里人成〜ハ馬成  
幸〜に旋風〜と巻籠〜  
馬の前りた〜車ハ端の物〜  
〜旋風大ハ成馬〜  
〜中ハ細〜  
〜馬類〜挿〜  
〜其時〜  
知人〜若旋風馬〜  
馬の〜と掛〜光明其言と呪〜  
失〜馬と恙〜挽馬風〜  
備〜ギバハの事〜見〜  
尾濃後遠冬別の回〜



其肉同友新沃等

實名忠雄馬御の隨心流りて門下を多く  
馬の奉りたる心と死に結業びく英哲なり

の況りハ頼馬とて馬の卒死とて云之馬也

ふくと云心也頼の字かこふくと云崩る

かつると云を列むなり折ダイバの況區也一況

大魔り記とは神雲中より取る時ハ馬眼と塞

進む是れとむ早むとバ鞍下落者も倒る

馬の如くみとて瘡と兼ぶと想身直立不精神

乱まると死するありと云昔天文六年夏六月日

將軍家 是利三代將軍 義晴公の代 富山修理吉義忠とて

愛宕山へ代系ノ使と遣とて下向の折うら

松の色とて一女忽然と来り富山が宗馬の瘡と

執りて殺すとひとて馬忽り倒れ死とて

と云りハダイバと云ハ神ノ魔障の来ぐ毎(糺)と

秋夜是易の死り見えり其餘頼馬の況救多

有ゆもとて汁へ糺とて富山義忠が遣ひ

そりり一女と吉松が見ふ所の怪女とい

似たり是亦の事ハ諸國遊歴とて尋明とて

愛とて人々も心得主を夜半也文也人傳

みとてハ支打一難とて業也在國りるると

は怪と遣ふ所も多とてハ我國名古色り

甚希ある事とて人々

竹葉馬り一葉あるは馬を乗ふゆゑ其  
竹葉(葉)又馬を乗ふゆゑ其  
餘の道と乗馬りて馬の氣を  
乗りてギバがひく馬死せし  
の藝は秀なる人々馬を好む  
ハ怪と遣ふ所も多とてハ

そ外諸國の者より尋ふり更には怪と知りざる  
因と有り見えずより漢去りて冬ハ馬赤と  
系ると云事有馬赤とハ馬の災害と云ハ神也  
依と云類馬おぐの類と云馬事高儀と云目念  
より又平が今按り類馬と云ハ馬の所死と云  
病也馬經大全ハ馬の年死ハ心肝絶と有附送りと云大馬の略ハ  
外非と受て急死する之ハ消書り者ハ馬の傷寒なり  
右ハ病りお遠か御りハ彼魔おり然傷と云  
所死と云類馬病と云所死と云と混と云  
魔おりと類馬の名と負ハせハるハハハハ  
あも河は病ハ避給と云とと療治ハ河ふと云  
魔おりハ療治ハ有まどと云とと避方ハ有魔  
大極の本れあり馬と畜又常徳の者ハ業と云心得

産産と事之凡ハ魔おり掛らまて所死なり  
そ馬ハ尻の穴内より外の方へ去き楯と云  
突出と云事ハ因脱と云事ハ彼魔おり  
抜出と云俗流と云虚りハ事なり是也  
遠列の方言り類馬風と云ハ事ありて事  
竟ハ此魔害の形と云因と云所死と云馬の肛門  
ハ破脱と云事ハ因と云事ハ事ハ事ハ事ハ  
心と因ハ知りまて人ハ故分り業より思ら  
くハ彼河童が人と云ハ肛門と楯と目日の傷  
りハ因ド水死と云河童の形ハ思り何也  
肛門の因脱せざらと云ハ死すハ馬の肛門ハ  
右松の見ハ事治場と云死すハ馬の肛門ハ



あふり

と



是れ  
是れ  
あふりの魚也

口  
口のあふり

目  
目のあふり

あふり

一  
一すみの

あふり

あふりの

あふり

あふり

あふり  
あふり



百年  
百年のあふり十九日

あふり  
あふりの魚也

あふり  
あふりの魚也

あふり  
あふりの魚也

あふりの

あふり

あふり  
あふり

ちいこすぬ



いさぎの美よ

六月十日夕七時  
年慶場にはあり

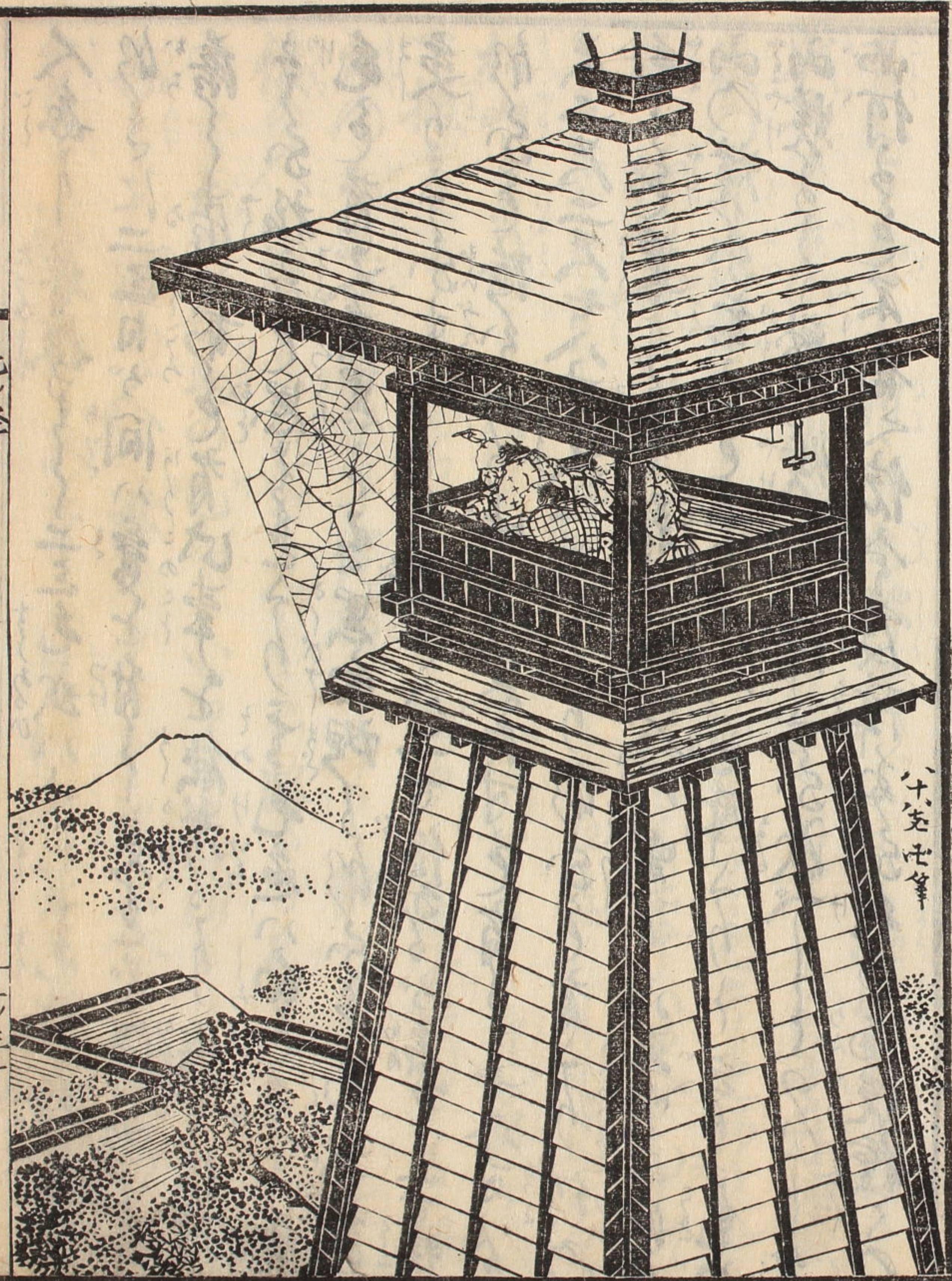
梅意亭  
印

毛の降きふ事

古くよと毛の降きふ事  
と心休まふ事  
十九日の朝四時  
り下り毛のゆり  
と河の  
あふま  
たりと  
云ふに  
あも  
毛を  
拾ひ  
又市谷  
御館内  
或人の世  
又松山

毛ノ降

二ノ二十九



毛ノ降

一ノ三十

十卷廿筆

法性寺塔へりち前少一の廣場の毛入りたるを  
 澤山り落居く中よハ六寸斗の長さも毛有  
 しと捨ひあつて毛入り陣りく雅さ子ども達り  
 世も毛色色後近隣より一白毛捨ひく板居  
 寺の西故かの廣場より向まこありときくと忽ち  
 毛仍く七八寸位より尺斗の長さも毛と田ぬ  
 捨ひ束りしとまよりと辰と亥合とるり風の吹  
 せよりの多あり有ども廣くは中跡か  
 所を降り或人の云よハ十八日の七つより  
 曇りもの毛がゆかると云ゆ忽何事よやと思ひ  
 居りしに殊なりたききハ十八日の夜のそ  
 めも毛入りと夕刻前よりぬりてか事なり



人毎り母探りし二毛或ハ十毛其毛は拾はるハ  
のまに二三日が回ハ骨を骨く見まを澤山り  
落し居る所も有以事を能考りり遠くに降  
る所根もと思も是より毛色ハ白毛多く黒  
毛も有又黒毛も黒白相つゆふと白黒の  
更りてふもまも長ハ二寸位のが多く三寸位  
ゆふも居る所中ハ五六寸と有七七八寸ハ  
尺二尺二尺七八寸又三尺たりゆふも有り竹の  
毛も更りて糸(糸)老人の鬚りハ天明年漢留  
山の焼か前もとい色りの毛降りり云り毛ハ  
山の焼も一畝の焼毛の降りて成べりといひが  
如何も不審之依今度降ゆふ毛の福祝檀の

奉を中出り竹より云獅子のくま極歎屋室めく  
戦りくまの或ハ外國の降りて色も云外博識  
家の弄況孫海も少なりしき色も色も色も  
ゆふ毛の降りて又如何成故と云事ハ更にも  
まも毛も色も降りてお遠りし毛を色  
松山と云所り後ハ小林某の門にゆりて拾はるハ  
一撮をたりて扱たるゆふ毛も産毛の毛も根  
えの毛込付居りり能扱りて懸へ垂るも色も  
後の人ハ現り毛を見りて毛ハおの  
まど大の毛馬の毛もといり毛落し居る所の故  
呉りて後の人ハ殊りし思入べり去りて  
實り降りり事の奉ハ毛時意と云あり拾はる

人形をぞと毎へごとく皆く一毛けりて成居  
きふり花の如く一掃のまき拾ひたるは年中  
の奇形りともく感あり甲別名のま状は  
六月の末より白毛降り出すより六月の  
初り竹も名付け種も毛とて入るまの諸國の  
事をも尋ふり五畿内も東國も悉くゆりて大坂  
あども降る事ハ怪りて入るまど強別ハ降  
ぬとてす余必何國に跡もくハ坂安行さる  
しとおもひ残り多し江戸ハ六月十八日ハ  
降奥別岩城平ハ六月の廿九日ゆり名吉屋ハ  
七月の八日七ツ時より登相より降るまど三日  
の間ハゆりしるま間ハ追く毛を拾ひたりとす

皆毛ハ圓く事ゆりて甲別ハ白多く名吉屋ハ葉と  
黒多く白ハ少し事也其くも毎へごとく事  
降るハ日の東西前後の事又つづき事ゆり  
和漢合運り慶長九年京師畿内関東諸國降毛長  
四五寸同三年六月四日降毛長四五寸  
又武記り寛保三年七月十六日夜毛降  
安永五年二月伊勢尾張も毛降その日の落首也  
舟形も見たり  
天明もも余個ハあつて江戸ハ毛ゆりたるにお遠  
の古き人ハありたりと特降るも毛あり  
しるまゆりては見たり種も何れも  
精し弾の筆記と見むゆり多し唯南越

北惠須談り死ハクシヨウタンふかひの妻ハクシヨウくくく死ハクシヨウ  
りたをり今全交とたり記イマゼンケン

水雲須談スイウン前篇二ゼンペンニ貞政二五年七月エイドウニゴトシ昔は戸小雨降て

その中よ毛とゆソノナカヨモトユせり丸の月マリのツキ八列ハツレツくく多タカクり

一と我多イツトワタくハ色白シロイロく長ナガクさ六寸ムササヒ跡アトり長ナガクきハ

一尺二三寸イツシヤクニサンチンと何り色赤シロアカくもたまタマく何りナニく

京キョウくも親ミナくき人ヒトより拾ヒラハ丸マく毛モと送オクり執シツ

勢セが馬ウマの尾ビのゆユくさの毛モ何りナニに戸ド中にナカニ常トコ

降フりキ幸コト何ナニ執シツ乃ナリ毛モ少シく幾イカ万マン丈ヂヤウ乃ナリ毛モありや

く不フ審シン乃ナリ幸コト何ナニりキ亦マタ多タカク今イマ年ネンの毛モ色イロは隋ズイの

毛モ今イマ目メ下ゲ幸コト何ナニりキ又マタ次ツギり出デく隋ズイの時トキり

降フりキ亦マタ多タカク目メ下ゲ幸コト何ナニりキ又マタ次ツギり出デく隋ズイの時トキり

漢書カンショり天漢九年三月天雨白毛三年八月天雨白テンカン

鰲カウ鰲者毛之強曲者也カウシヤウモウノキヤウキョウキョウノモト

又晋書ウチノキタニり泰始八年五月蜀地雨白毛タイシヤクハチンゴトシ

又隋書ウチノキタニり開皇六年七月京師雨毛如髮尾長者三尺クワイシヤクニクワウ

餘短者六七寸コノミダシヤクハチン是年關中米粟貴コトシノトシノクワンチュウノコメノコト

叔ウチノコは天保テンポの申年ウチノコノウチノコトシハ蘇敵ソトク出デ来キどトく是コノ儀ギ儀ギよ及キび

きり天明テイメイの頃キョも各オノオノ列レツの帆ファン儀ギもモ有アリり右ウチノコ隋ズイの

困クワン皇年クワンノキタニく今イマ一イツ回ヒ松マツありと偶オウ中チュウせセくそのりけ外ウチノコ漢カン去キ

ゆも色イロ性セイく有アリり皆オノオノ支シ費ヒ邦ホウのくもたつや有アリり幸コトたタん

漬ヅク見ミ故コ志シぬ事コトのく之コノ行ユクもモせよ不思オモヒ儀ギあり事コト

のり依ヨり予ヨ規キ見ミ受ウケり浪ナミりと妻メ友トモ記キ一イツ並ナラぬ

白蛇靈異と記した事

市谷自證院常備阿闍梨の比叡山西谷佛宗院  
任職の時文化八年辛未六月廿八日之勅寺谷乃十妙院  
初より一より八返月は谷の赤々天(白地と持来り  
昔今昔一世一居の地と見く初めよの事  
ゆゑ志を一吐一居の内よ面かく持来り一よりその地  
長き四尺をより有るをまじり准と云ふ白地に  
少くをより書きて合と崩文とあびつる板より  
かゝ先澤有る眼は紅なり想く地は瀧ハ一目  
見えは後とぞの心持有る行をく思  
く帰らるるげらるるおたるる白地は隈り顔  
優劣にげらるるをらるるの園がは白地と  
同板より如行の優劣懸絶帰るぬとのり

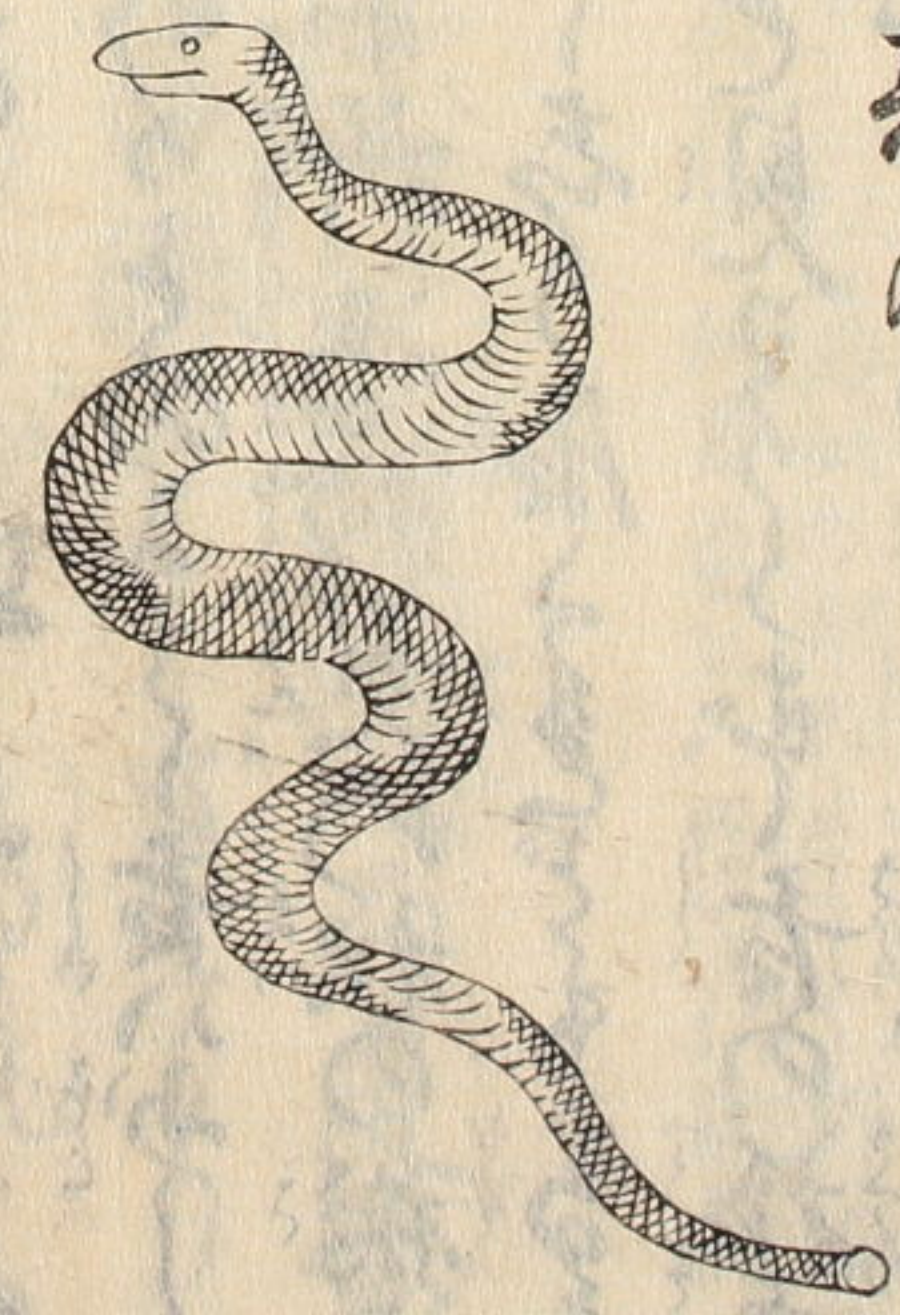
育るの地は白地り甘くハまぐ辛美成由来  
り元は地ハ京の山作とハ糸河原の夕涼より  
見せおるるをり紀州熊野浦より金十支ゆ  
洞へ来り地をり物よは地不思議成事ハ疾  
疾と色乃るけ程のさよよたのり色ハ心成ぬ  
事ハ不審ませ一うち四月廿二日巳の巳は彼白地と  
入色並つるか箱の鉄網ハ僅り小指と色り葉のほど  
白りよ指物と迹失り山作と驚き強めてま  
近色ハ跡のまらり尋ひてしむと出むはうハ  
尋つて方役とめり  
ト者ハ人まら語らひらりせらるよそのうち勝  
きり御者の判りは是ハ迹するのりハ行へ



俗に是と七目と云江の嶋乃其女天ハ  
 欽明天皇乃御宇六年乙丑四月乙巳の日リ神々  
 出現す一多ひく社と爲り建く後今より御まで  
 四月乙巳乃日十月乙未の日に祭奉りハ外之  
 海白乃妙合ハ念捨す一々奉ハ勿偏有るを律  
 大辨文天秘決ハ巳の日亥の日と云く海白と云る人育是經出たり必信用  
 聖雲寺の國基名別の大徳寺リ御持た天秘決ハ其女天女と云祥天女と同一  
 乃の解澤有ると云ふハ其女ハ二の卷其女天女と云祥天女と同一  
 又と正對化靈の日又して海白之是ハ元神仙家の秘密盡云の傳を弘法大師解  
 書先生より轉傳傳へ来り多秘者奉之  
 律師の信用せしむる云ふハ又云く  
 又曰濱別言松の城下吉祥園院 仁和寺の院家の庭前へ  
 文政乃初法と出つか白蛇ハ白眼と云育きり  
 又合ハをより雪白りハ白くハ一藤藁文と

おびきり如竹よと雲ら委抱く一近く入り能  
 見く一と一驚うむすあ海行るとのう一古ハ一も  
 出さく一と一なり江本取折嶋妙見乃松の樹よ  
 放く一と一白蛇ハ危人見く一志り居く一も一  
 梢乃一と一居る故白眼赤眼と見く一と一古の松も  
 外く一と一ハ地天保乃中比ハこの一と一更ハ形と  
 形ハ一と一といり如竹さ一と一や主後弘化奉  
 中に又餘種大故白蛇と云松ハ一と一教一と一と一  
 一と一見く  
 天保年中武別豊清乃田川乃側なる深田村よて捕へ  
 たりといハ白蛇と云田乃長天と云あり一と一魔室ハ因  
 て諸人よ見せたり一乃蛇二尺六寸餘り一と一育けん

白蛇よか〜中層葉筋の曇々と帯く舌ハ出さば温  
 順〜電らあまの形りハ蛇ハ尾の尖よあはぬ  
 小豆粒程の令々舍利玉乃色り成その自出葉居り  
 平形亦平なりハ蛇天保十年己亥驚く後まこあさ  
 白蛇と相並ぬ〜蛇あよべりハ度ハ八條種葛布を  
 帯りとりとるり白蛇色は分多く居るそのと見〜り  
 右浮間村〜捕うハ蛇ハ斯の〜  
 尾り玉河り〜形粹令  
 常の蛇よ美あ〜世常の  
 蛇〜そのあま〜蛇の  
 蛇〜物〜成そのり  
 蛇〜如行よ〜過葉よ〜



蛇らあまの形り目ハ薄赤り〜と見〜えり  
 又云由永二年己巳月浅葉高板町津巻五郎と云  
 その身ハ昔と云武別長三郎突新が原〜  
 一と云ハ蛇元下総の田千葉於横戸舞々天よは久居り〜平場沼  
 白蛇と見〜りちさハ田又浅程乃口りよ〜長六  
 尺人餘り〜と云〜奇素形り雪白と云  
 身〜ハち〜か〜美〜と〜艶育て氣の  
 柄幾の〜〜尾先よ小豆粒程乃玉有鱗を  
 中〜とハ丸の實の〜  
 中〜ハ下ハ口角よ〜  
 蛇〜目ハ黒眼〜遊遊ハ出せ〜  
 不味成〜の〜一〜記〜浮間村

あま捕あふ地と回一松あるものさしとまふハ  
又一入新藤のり

瓶の行列英鱈と行一ふ事

附火と焼と事

下男吉松が流りけふき渠が在りて家又抱(率)  
馬方り流と云者けり流の引明は馬と率と出  
きるに在り村難きの敷流り瓶之に火合合尾  
て流るる故標とあふきバ驚とて迎共けり流ハ  
吏より遠方へ馬率約と夜り入毎のてり行心さ  
細道と降り来るよ大谷の通りあふり約とさ  
久安斤男居る流通約とさ馬と率約り又  
通り人育る流路成業と待一回り流二里程の

道と二時とさり柳り流家と降りり日  
吉松と回一方へ馬と率と約り合前り先方  
あふり合さるる流よりハ二里程流さるる  
との事故と流りり流が降りり回とさ  
吉松とゆりさるる流り新とさ流り  
回より今宵ハ又とさりつと大谷と約り  
あふり道よ回とさり言ふ吉松云我と回  
道と降りり何とさるる流りりけり  
ありと云ハつやたなぬと西安まと扱と  
敷く罵らまると云まハ瓶のりさるる化  
さふりありとさ皆と後ひり何とさ成り  
森よりり回とさり入口とさんくと下り者首



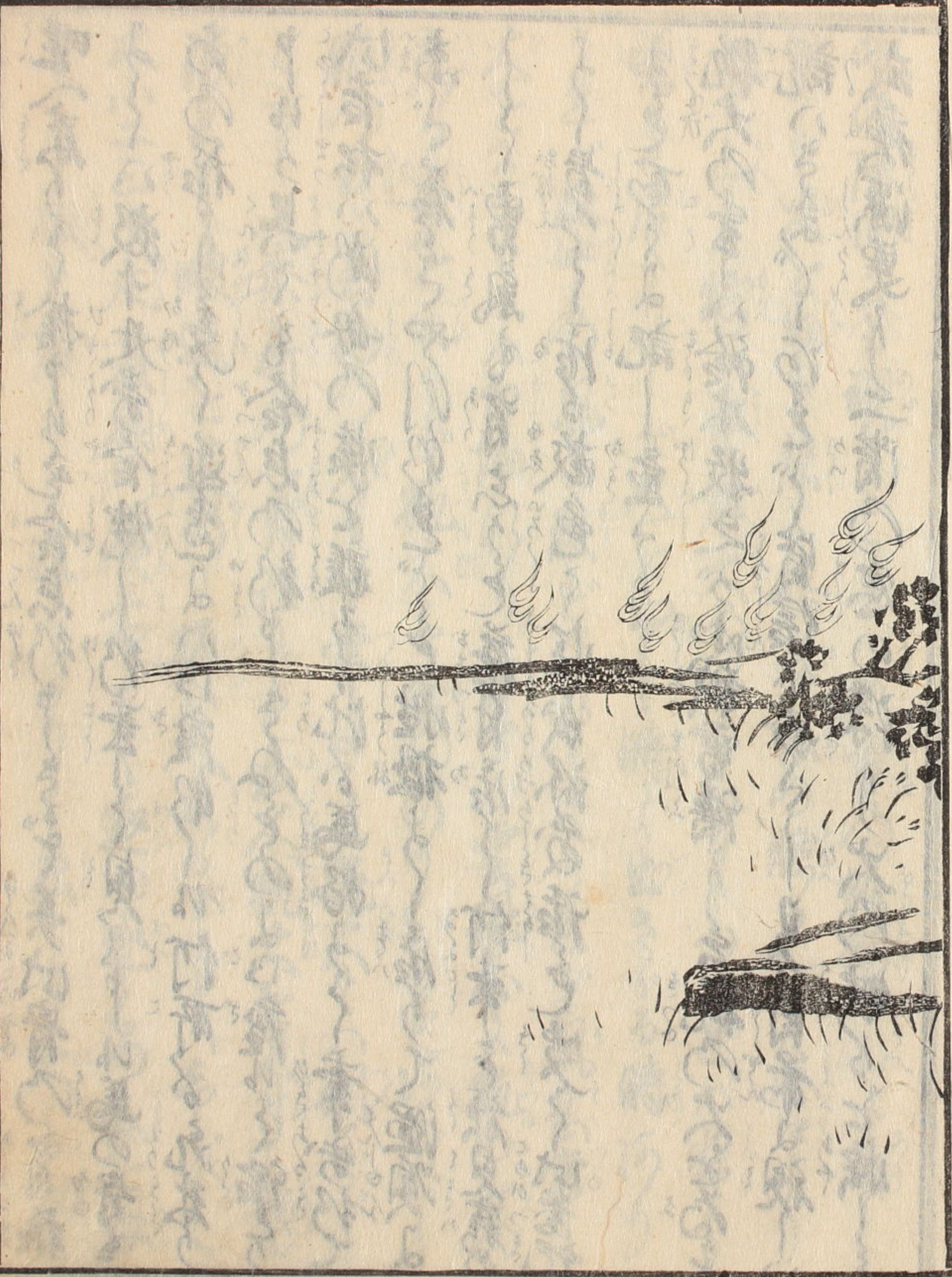


幸と大谷の行列り途中は是を疎みく能考はハ  
物々々山登り其澤の田舎ハ一筋道よりハ其夜乃  
中ハ八跡や先ハ村へ歸り者も山登り外ハ逢ふ  
そのハ二人も山登りゆそのハ街道毎り行くとハ  
逢ふと大谷乃其行ハ若く是行乃と逢ふ  
其月と前より先通山登り馬と幸徑のそのハ  
驚く存まり居り幸ハ山登りゆそのハ其行ハ  
後中り有と顔ハ物々々懸ハ人々そのともハ  
しう此ハ見届くうと顔ハ懸と人々何も  
少くも替りくる幸ハ行ゆと人々其行と皆  
酒声ハ山登り一夜ハ大谷入一夜ハ大谷故心居て其場  
めくハ殊乃行列り馬と傍へ引込居り其

きくく幸跡念ハ山登りゆそのハ後登りハ其早  
たまさる幸ゆとハ山登りゆその行列ハ先其行  
駕籠長柄合羽籠に到るまが其乃大谷ハ替り  
幸ハ山登りゆと懸りゆと志津野村色ゆとハ其  
宵幸故さくく懸り幸を思ハ其ハ其子と生  
羨濃物たど云幸者く人の妻と成り子と生  
物垂乃姓の出来ハ其幸ゆとあまハ其物ホの子孫  
乃有く餘國ハ勝きく其妻と成り其ハ其會  
の地より其住り色ハ其木乃幸ハ其ハ其  
又物の大と焼き幸ハ其人乃其幸ハ其何成其  
焼きり其居りやと向り其色ハ其馬乃其  
煙く焼きり其居り其色ハ其成幸ハ其

存りきざい小ぬりぐ海の疾く多し焼き事には  
行故又焼き事なりやさきざいゆりゆり物ども愁  
焼き人採り意見する事あり存りゆり疾  
事とも面も垂び殿後焼き向う事ありゆり  
思ひゆり道あるよお遠なり如行成事の  
焼きある見形ゆりやまゆり存りゆり  
小雨降ゆりゆり傘ととも道筋と河まで回  
りり船の中又海と見ゆりゆり大と焼  
連綿とありゆり連綿と能見ゆりゆり  
大計り数つと自然ゆりゆり十計と行ゆり  
取めゆり声と海ゆり大と声ゆりヤイと云道  
ゆり物と思ひゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆり物と思ひゆりゆりゆりゆりゆり

と元ゆりゆり唯一声ワイと声と海ゆりゆり  
一度は消去ゆりゆり晴はゆりゆり余りの  
楽が二石懸命ゆりゆり声の浪りゆりゆり  
ゆりゆり傘ゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
行とありゆりゆりゆり馬の骨や骨と近道と探り  
見ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
着る毛ゆりゆり焼灯と焼き畑中の近道とゆり  
能見ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
まゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
道筋と下ゆりゆりゆり馬の骨とゆりゆり  
まゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
思ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり



壁へ来りて捨りし合意なりとて其は骨の有格  
うへに敷十丈奇合焼く事と見ゆり馬の骨も  
あつて格より多く近きは口産の竹所を丸きり  
ゆりし其も合意の形ゆきぬその口産ゆき格より  
は若松の樹木の格と難る比の馬好く事ありて  
未だ若きや門の格と性格ゆき格よりて温順よ  
し勇氣も有るも格より竹事と能見窮め  
よき骨ゆき格の故色く格産格産格と支くは格記  
うへに記し一並より  
靴火の事ハ格本格之が小靴雷溝り云靴火の火と為る  
説ハさまぐ河まど皆信がく一日が目前は靴火  
或夜深更り二階の窓の浮り火の映ると格

其の隙間より現るる色ハ靴雪の格揚のよき  
ゆり火と出ると能くれば其の格の燃るる色は  
かより燃る事寒火の格ゆき格より色ハ格  
現るる格より火と出ると時と出ると格  
うき格腹中の氣は格ゆき格ゆき格ゆき格  
火と出ると格ハ格ゆき格ゆき格ゆき格  
格の事と云く靴火の格ゆき格ゆき格ゆき格  
靴の玉と云物ゆき格ゆき格ゆき格ゆき格  
と云く又秦昇の二骨活ると成人靴火と見付て格  
源より噴道と遠く靴ハ人來るべしハ格ゆき格  
大小二十丈最格の廣前より格ゆき格ゆき格  
ゆき格ゆき格ゆき格ゆき格ゆき格ゆき格

このハ渠が島にヨウと飛ぶ時は中よりフツト島尖  
出づき島大のどろとろくと先の大控はより二三と前  
ろく来るの先を後げよ来る事なり勢よまヨウト  
死すと時ろもちろく遠方よりま色バ明滅以續  
きると揮りけりし有き未ハ皆而後記ハ新入に  
あび元来出島と云事ハ能くも云事之去るが  
又我國ろくも去信ハ馬の骨ろく焼くも云事美濃  
ろくも信り事ろく回法けり又回ハ善濃の月ろくも  
南本島乃去信ハ馬乃凡ろく大と焼くも云信り  
馬乃凡ハ馬の交治ろくも云事又予ガ知ろくと信館山彦乃  
藩中言梨竹某の云く亡父ハ法地と好く山嶺と  
ちろくろく或秋乃夜田小庭よ信居るるハ杭大と焼く

阪へ小倉の方へ来るま例へ引舟も亦凡べと侍居る  
肉り逆ハ杭ハ何れも小倉乃下まぐ来る故法地と  
元連ろく亦ろく思入ハ杭と知ろくとワイと声  
叫びろく迎奏ろり登朝を叫びろり馬乃骨一ツ骨  
もろり是令ろく彼ガ作天ろく凡信一筋ろくもんれを  
まを云信乃云色ろ杭大ハ馬の骨ろく焼くも云事  
慮ろくハちろりろく事ハ色ホとん考ろりよと  
骨と凡と色ろの焼ろくも者ろ量りかろ  
人の金と掠ろろもよせの教ろろ事  
附出ぎろひの事  
伊勢乃國河乃津乃南の方よ雲津と云島りり或  
豪家のも代供人き人石連主人の代系り

大神宮のまに神樂の光るは下に看りさる疾  
神樂料の金子數十両有者つる悉盜しつるな  
大い警まき新あもどとせんまぶたう供男よりのひらるハ  
我ふ松の始末出来ふふハ再至家ハ帰しつる  
現世しつるきく覚しつるさせの罪と作しつる  
前世の看業のなまもあと思ふゆりけしハ神佛へ  
多清のしつる松成横難消滅と形ふべしつる覚悟と  
松ありつるはハ何ととつる國許へゆりは事と  
其ハ我ふと外り少の松もゆりつるは場を  
修り者と成人つるの月ととつる何松とと露命と  
はまきつる國政とつる建忽ち妻と妻と國と  
頃おちのつる年月とつる又雲津若とつる若りの心前

病りて盗の者ハは家とと思ひつる能く見り  
其家の昔の松りつる三流よ昔法とつる外高者の  
修りつる余り松子と松り居つるあまの近きと  
要安寺の受けしはあまの先きとつる金と拾ひと  
し事つるつるまのつる何の松りよまの身代りつる  
後らまのつるまのつるつるつるつるつるつるつる  
前乃陰悪とつるつるつるつるつるつるつるつる  
事とつるつるつるつるつるつるつるつるつる  
修りつるつるつるつるつるつるつるつるつる  
ありつるつるつるつるつるつるつるつるつる  
教増つるつるつるつるつるつるつるつるつる  
肉り入つるつるつるつるつるつるつるつるつる

養生いんじやうとて其その身み此こゝ甚こゝろ憂うれひに堪たへず  
の身みを七日ななひ目めりて其その毒どくの毒どくありて死しに死しり  
死しをりて是こゝろハ寛くわん政せいの末すえつ方の事ことを以もつて我われハ  
其その頃ころハ伊い勢せの津つり居ゐて危あやしき沙さ汰た一いつ現げんり  
吹ふ知ち一いつ事ことを以もつて死しりて別べつの仇あだ之の時ときの我われ本もとと  
りて其その時ときに津つり居ゐて一いつありて一いつバ以もつて其その集あつま  
りて其その時ときと見みて其その身みと連つりて其その身みと牛うし込こめ  
松しょう源げん寺じの先せん方ほう丈ぢやうの世よのりまて其その人ひとの靈たまのあ  
まはしき一いつ事ことを以もつて其その身みと連つりて其その身みと牛うし込こめ  
四よ谷たにりお若わかと云いふ如ごとく女に育そだちて其その身みと連つりて其その身みと牛うし込こめ  
まはしき一いつ事ことを以もつて其その身みと連つりて其その身みと牛うし込こめ  
崩ぶつ生せいせし一いつの事ことハ四よ谷たに焚くわ法ぽうとて其その身みと連つりて其その身みと牛うし込こめ

よと仰おほり童わらわ女めと人ひと能あたはる事ことを以もつて其その身みと連つりて其その身みと牛うし込こめ  
さうらうと云いふハ三さん井い寺じの頼たの家け河か間ま紫むら崩ぶつと云いふ  
叡えい山さんの徑ぢやう巻まと噫あは荒らしと云いふと云いふと云いふと云いふと云いふ  
りて其その身みと連つりて其その身みと牛うし込こめ  
りて其その身みと連つりて其その身みと牛うし込こめ  
思おもはしき一いつ事ことを以もつて其その身みと連つりて其その身みと牛うし込こめ  
まはしき一いつ事ことを以もつて其その身みと連つりて其その身みと牛うし込こめ  
予よも後のち天てん保ほ九く年ねん伊い勢せ路ろ通と行ぎやうの時ときの我われの事ことを  
尋たづねて其その身みと連つりて其その身みと牛うし込こめ  
間ま久く木き村むらと云いふ建た場ばの事ことを以もつて其その身みと連つりて其その身みと牛うし込こめ  
かぎ云いふ建た場ばを以もつて其その身みと連つりて其その身みと牛うし込こめ  
断たん終しゆうと云いふ跡あとを以もつて其その身みと連つりて其その身みと牛うし込こめ





木村 貞吉

う〜ハ今よ〜も〜ハ傳え誰あ〜ぬそのとめさ  
 事たちを〜も早少〜年経〜事ゆゑを〜色り  
 とも〜根〜と怪りあ〜り〜か〜の〜あ〜剛〜予の  
 駕籠と異〜ふ人足の吐〜ハ私の親の能存居  
 て度〜吐〜ハ水り〜ハ尋常の業〜りハ餘程あ〜さ  
 業〜り〜色〜ハ業〜も〜と天井〜り〜と〜も〜と〜間〜り〜  
 一面〜り〜と〜ま〜り〜居〜り〜との事〜と〜西〜に〜住〜む〜とい〜り  
 江戸具腰町〜り筆墨の汚用と物〜安夜卓筆  
 と〜云者〜を〜予〜が〜は〜怪〜矣〜と〜記〜し〜つ〜ふ〜事〜を〜具〜し〜て〜  
 云〜り〜と〜我〜木〜が〜實〜父〜ハ〜伊〜勢〜の〜國〜より〜出〜つ〜ふ〜者  
 り〜〜は〜業〜の〜性〜と〜能〜存〜居〜我〜木〜り〜と〜云  
 多〜と〜の〜と〜も〜の〜時〜り〜と〜本〜村〜の〜建〜場〜也〜と〜右〜業〜の

根云と必支拂り〜悪報の来事と心持並〜  
志ある〜故其去地〜能支行〜前系記  
有〜故〜少〜と違ひな〜  
家の棟〜雲山〜の如〜は集りて〜  
あ〜〜悪人の連〜り〜  
う〜〜故屋の因〜り〜  
其堂の集り〜り〜  
〜と事〜と〜  
予に若く者〜予思〜  
鬱念と晴〜ん〜  
と〜通〜り〜  
見〜く〜

根云故形ハ面白〜作〜  
〜見〜色〜  
通〜り〜  
舞妓の根言〜  
用〜り〜  
〜口〜先〜  
花と蝶〜  
打柄〜  
跡の外〜  
至人〜  
や〜同〜  
形〜

けかぐ一度の内り格の控格り百合の花と絵  
書きまら有るり人々驚く早速其格と引を  
くまば速り收く成り一耳囊と云は筆に  
見えたり又云能別殿の書所り相行某と云  
者の前席の成事と回書り委交書記有  
又河波の徳鳴り嘉子と云く婦ひくく甚ど  
恐る者有或時餘人歎きり人へ嘉子と云  
付ふかりたりの内首りありく重前大の  
腹より内腹出くく難儀せし事有る右  
藩の一人より此り受留色し建或人の活せし  
前の百合と回下類之予が志きる人よと毛虫  
きくひ有る若天井のどに一丹くくも有り

居る席へ入るをぞのくくも暗り志き  
此行成酒裏遊具の面白く席うくく居るえ  
兼ふこの事と主母親友有り其くくひ成  
奉りねるり遠くくの稻生平太所が別強  
うくく山本立所在のくく魔王の類の大怪り  
出合くく少く心たもまごきくく妖怪の  
生得座の成蛇別と出くくさかたの筆と云  
魂と云くかすり成りくの事ハ稻生怪談  
縁りくかの強巻おりの者くく人のある事  
のりく童蒙の時或人の赤くく蝶の婦の成  
児童者くく常く滅の教おくく帯りに蝶と  
持身かくくへハ恐きおのくく後入事也く

政時法信養り〜餘りに事と〜入るる  
獲て〜押入〜中へ蝶と二三放せ〜りバ  
始ハ泣叫びあかり〜聲〜いひ  
咽〜見を〜死居〜り蝶の〜り  
とらば〜り肉交交り居〜之新の  
妙〜と有〜人の嬌〜あまもる  
事連ぬ〜滅〜り今昔お落り猫と  
恐る〜大庭吏法原官おとた〜か  
藤原の輔忠の朝臣大和守〜者〜り  
猫〜責〜速〜出させ〜事〜り  
是ハ法原が不忠故〜責〜か〜い  
事たり〜想〜〜益〜か〜ぬ人の嬌〜事ハ

男〜事〜り〜愛〜る  
其の〜見〜り嬌〜事〜り〜其有〜ぬと興  
樂〜む人〜有〜嬌〜む〜事〜り〜愛〜ま  
〜花〜と持〜も〜と〜と〜出〜す  
見〜事〜り〜心〜け〜び〜と〜出〜せ  
〜と〜捨〜る其似〜と〜この後〜り  
方〜後〜り〜小見〜り〜後〜り  
竊〜り花〜持〜り〜又花〜と〜と  
ゆゑ小見〜又〜び〜と〜と〜又先〜の如〜捨  
其似〜の〜竹度〜と〜回〜事〜と〜戀〜ハ  
思〜と〜事〜と〜思〜ハ竹度〜と  
〜後〜り〜出〜す〜故〜事〜り〜無〜

昔大藏乃大吏藤原乃清廉と  
 以者動く猫と恐まきり世乃人  
 猫恐まきり大吏とぞ名付けり此清廉  
 山城大和伊賀之箇國よ田と多く作  
 後量と徳人よく有よ藤原乃輔忠朝臣  
 大和乃身あり河の侍り其國乃  
 官物と僅使もまきりと老や南  
 以て清廉出まきるまきり灰毛  
 斑なる猫乃大い好るかみ  
 まきり其形へ入ると清廉  
 目より大い好る候と落して  
 迷ふとみり乃猫清廉が神とらざ



一雅集  
  


之乃南彼西の南と乞り初ふ  
 清廉音を替りり  
 堪兼る故先猫と  
 退りりまきり  
 乃猫鳴合音  
 耳と書りも  
 清廉行も  
 よ成ゆえ  
 やぐりも座  
 りあ大和乃國  
 宇陀の郡の家  
 河の稻米の下書と書せり官物と  
 出させし事今昔物語りあり



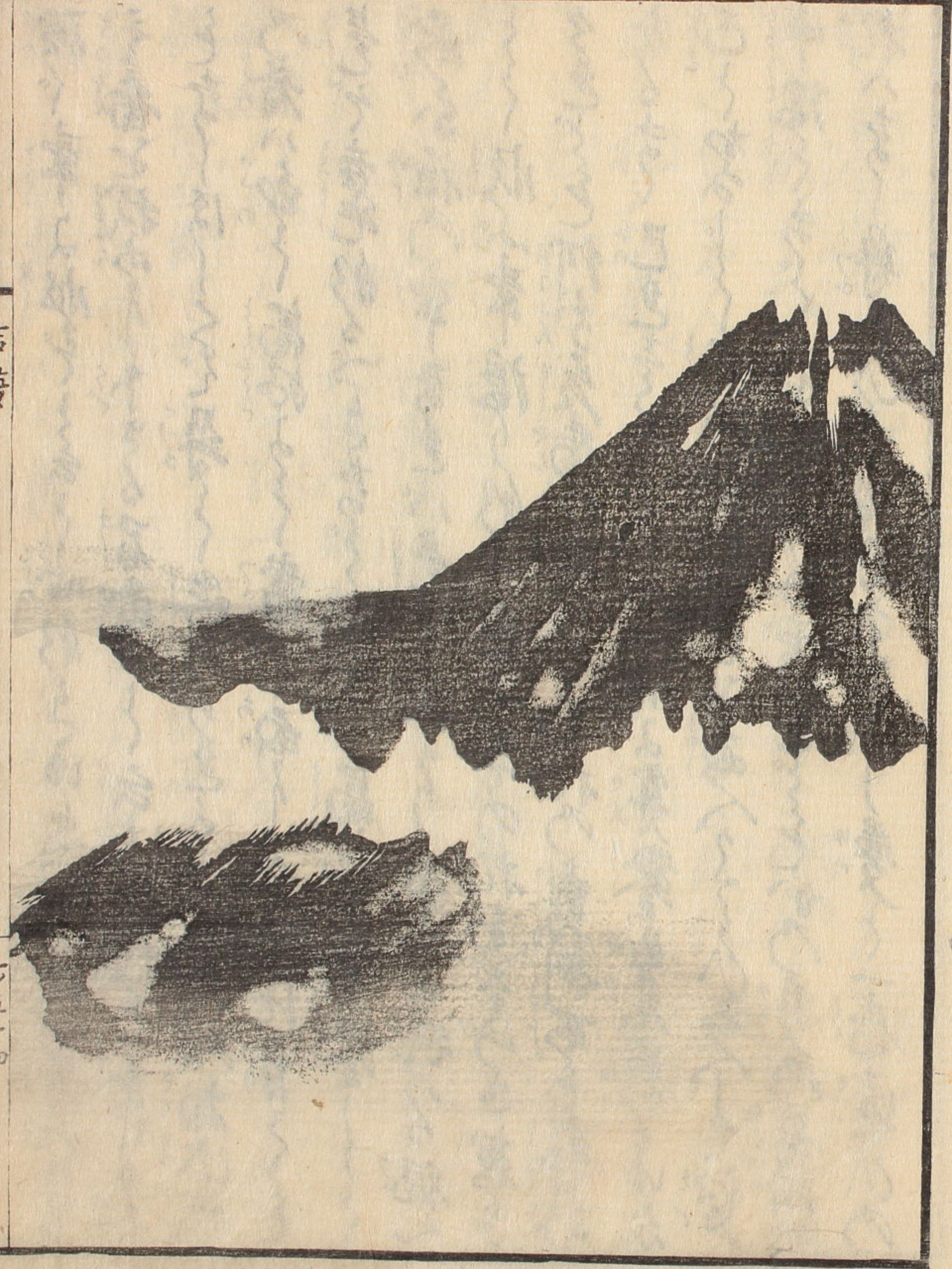
唇もどきと小児のけしと痛底の首そのハ後ま  
花とあけくも人へお育く見向とせざか見を  
首そのけしつすのせよと下の精神首その  
流とは事よ〜元愛とあ〜り〜〜〜圍らせ  
腹まよふか〜ハ首るあ事〜又右の見花と  
持居の時をとも見とせとる進其花と其よと  
〜〜〜見のいやらると樂〜〜〜あ〜り  
即り〜ハ見の持居花と元〜〜〜何  
首もあ〜り無る風情とあ〜〜見の圍りあ慈  
とふと具とふか〜と有あ右花と持居の小児よ  
ま花と具〜ハ〜ハ見ハたい〜と捨る  
真似と〜〜己の後の方〜〜〜思とけり

小児をう〜と大人と歌〜〜見せるハ先よは方  
歌〜〜見せ並〜故歌〜事と言〜又先ふも  
歌〜のけり是末ハ能人のま事め〜とらま  
その〜あ〜さう身小児〜り〜と教の根中  
候む〜事〜〜〜次あ来るあり侍伏と〜  
尺意に初〜とたの〜事ハ神子〜さま〜  
事〜と神大人よ對〜〜と先の人〜の嬌事と  
圍ら事〜りた〜ら事と強〜智〜圍〜ま  
〜〜〜お〜バ進事よ〜あ〜り〜武士と  
義〜り〜と〜ハ一命〜り〜見道〜  
有〜〜と〜ハ〜  
音夢〜と〜事

東部三石よ吉澤屋市兵清と云瀬戸物屋有各古屋  
出はるる〜予竹馬の乃知色たうりか音響く〜文章を  
少く有く世藝板打もと一通りハ行渡り居て品  
出る所の面白き男は者も板板ハ思渡成事ま  
平康成類の事ハ多〜ハ石遠や或ハ遠く〜先ハ  
理外ハ奇怪たぐ云事ハ少〜その故人〜是ハ實あり  
ち〜〜〜怪成事と人〜ハ縁遠く〜實と受事  
甚〜〜〜怪〜〜口産ハ而海奇妙不思渡〜云事ハ  
変〜〜有る事〜ハ存甚〜〜人〜ハ唯疑心  
多〜〜大群の事ハ心伏た〜子〜〜〜  
事〜〜〜眼前〜〜合息のゆ〜〜事〜〜見渡り  
宛早土三年とい前天保の物〜〜事〜〜決地例に

紀伊國屋之兵清〜紀伊の國の船同屋産ハ或時ハ兵清の  
中に、昨夜妙成夢と見ヤハ届土乃山より籠三繩一筋  
引張有〜響が届の札一枚控〜あり〜〜  
たり是ハ妙成事と思ひ〜〜札と見事〜何十何番と  
怪〜〜〜〜〜變成夢と見〜〜のう〜〜  
夢乃咄ハ〜産ハ居合〜〜〜〜  
久後お成〜ハ故殿〜ハ仕り兼〜〜〜  
右乃通りハ口産ハ物〜〜〜席ハ居合〜〜  
紀伊の國の船同屋長崎屋乃代の者〜〜〜  
扱〜〜ハ此〜〜色〜〜吉光〜〜〜  
ら〜〜ハ物〜〜め〜〜〜兵清ハ寛慶〜〜  
其乃板成事ハ一向好ま〜〜〜是ハ夢あり

吉夢



一五十四





強ぐ事よ悩むと云く心のさゆ名か乃代の者たゆら  
ま番と我あり下たるるる委うと云くに行ををせるを  
もたうほくく母く求めらまうく言へぬおは代  
乃者ハむく富好く常くぬり付風に付くを  
是ぞ吉兆のるべきと云く富れと穿鑿し  
求ふ程の事なまは是ぞ天より家ホ又換りる福  
くく暇ふ事浪りゆく垂りゆのれとまう子懸り  
くまどと何分た番のれく富れの賣捌りも救百  
なるまく已まき人まう一時又穿鑿出求ぬるゆ  
己とあまく富の好ゆの友とあ人くくひと人  
申端くまぐ悉く尋ひ索まどとかの夢の番附の  
札ハち尋ひびく詮方るさう一夢と一番遠ひの

札と見付垂る故せめく河のれありとと買丸  
くく測り札と買丸く富奥初と侍居り彼夢の  
あぞ身一たん百ある富り札と成る故代の者乃求め  
垂り札と一番遠ひるまバ神札と成り信るぬあ  
中の是ハ現在私存居り事うく如竹よと合点の  
初ぬ事ゆぐ事ゆぬとの不思議くやと者との  
うく山登ゆと市兵清治りまう予おひよ昔業回  
大臣を測とあぞ六位の時鞍馬寺よ籠り強ひく  
御帳の内より笈と強ふと夢又見あひに笈よ  
從二位在測とあまうり後其夢乃ぬ大臣と成  
あひく事あり又或書り右大臣歳八十二と強  
強く後意のぬく昇進く八十三の時大臣よ進

ありゆゑ彼寺より清く性日有大臣八十二乃由尔現と云と  
 之と今既りけりぬと念トありて昆沙門天亦  
 夢の中に示しありハ官ハ右大臣ありて有ハ年来勤  
 乃切り極く大臣より多り歳ハ八十七と示しありて  
 件乃歳り薨逝なりと云事有是ハ正安鞍馬乃  
 多門天乃示しあり靈夢ありと云け之其清の夢ハ何  
 なる神のませあり夢ハ市兵清乃不審思入と理り  
 あり實り一奇事と云あり

想山著岡奇集卷の巻

終



